

- 今日のテーマ

「キュビズムは美術にどんな影響を与えたのかに迫る#01」

- 簡単にオンライン用のお名前と地域など教えてください。

- キュビズムについて何か知りたいことありましたらお聞かせください。

第1章

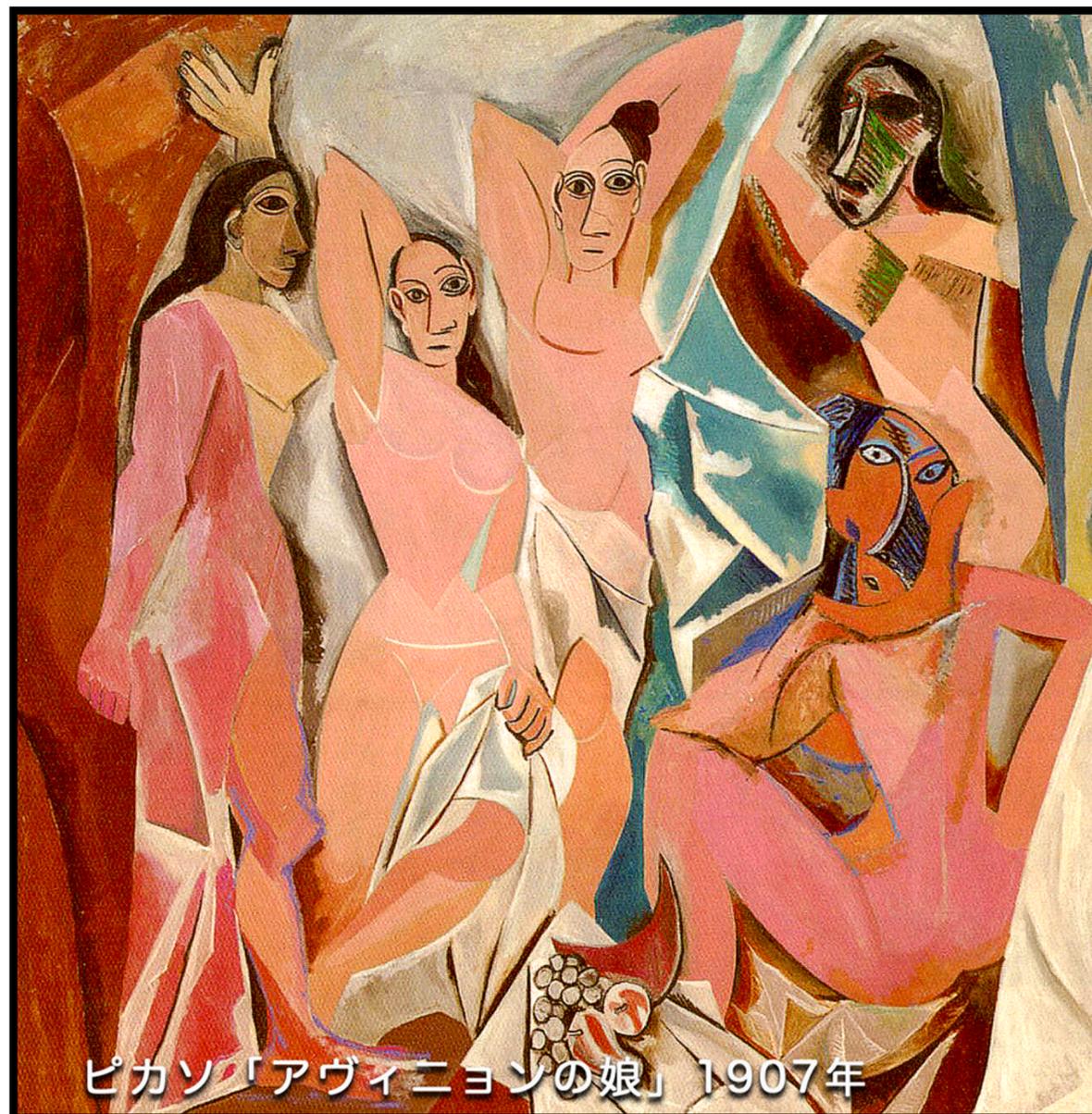
キュビズムの誕生(19世紀後半)

キュビズム誕生・・・19世紀後半、フランス・パリで活動していたパブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックの新たな実験的挑戦を契機に誕生した前衛芸術キュビズムは、認識の構造を覆す実験的挑戦だった。



セザンヌの水浴1894-1905年

○ポール・セザンヌ《大水浴》1894-1905年・・・
「**構成的筆触**」と呼ばれるセザンヌの技法は、集積することである種の**ダイナミズム**を感じさせる面を形成する。こうして構成的筆触により形成された各々の切り子状の面を区切る境界は、「**パサージュ**」と呼ばれる技法によって曖昧にされ、事物の輪郭や空間構成に、独特の揺らぎを与える効果を発揮している。

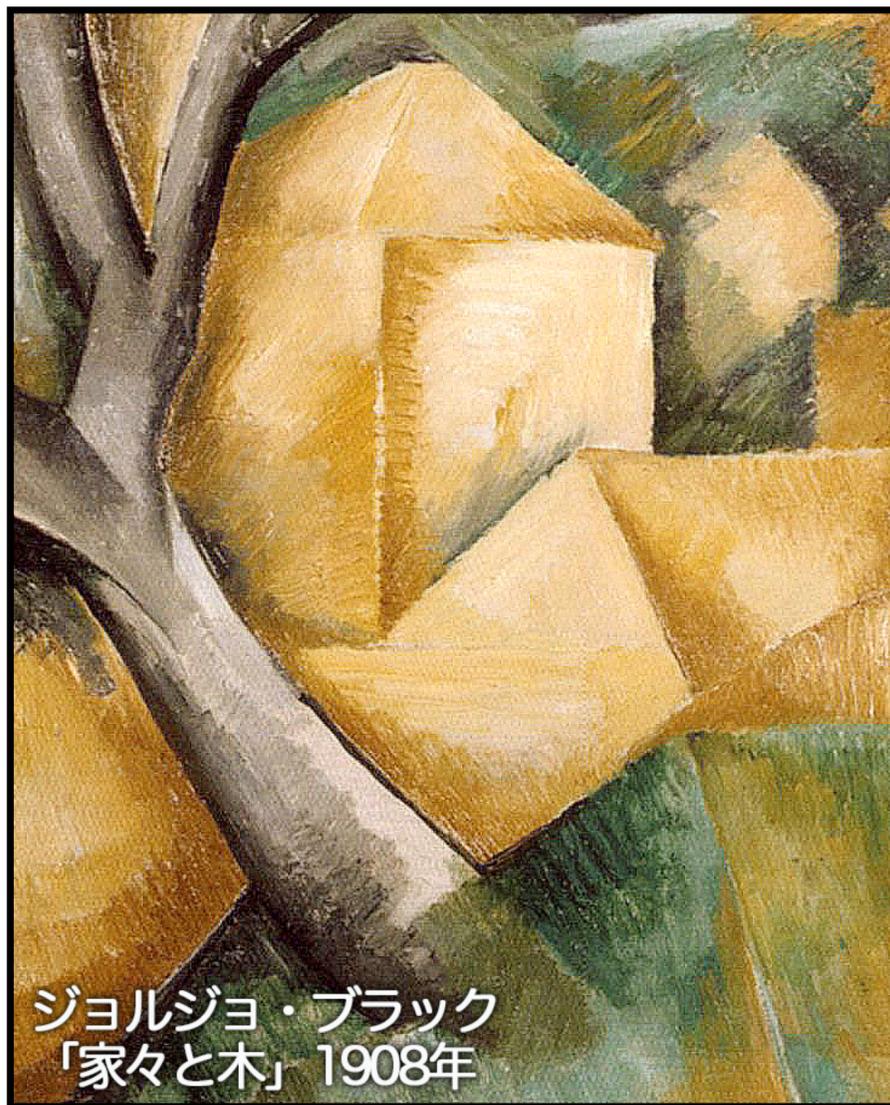


ピカソ「アヴィニヨンの娘」1907年

○パブロ・ピカソ〈アヴィニヨンの娘たち〉1907年・・・女性たちの頭部には、オセアニア彫刻（向かって左端の女性）や古代イベリア彫刻（中央で腕を振り上げる二人の女性）を思わせる図式化、**アフリカの仮面**（右二人）のような**歪曲した表現**が認められる。その難解さとエロティックな主題から、批評家アンドレ・サルモンは、この作品を「**哲学的娼婦宿**」と呼んだ。

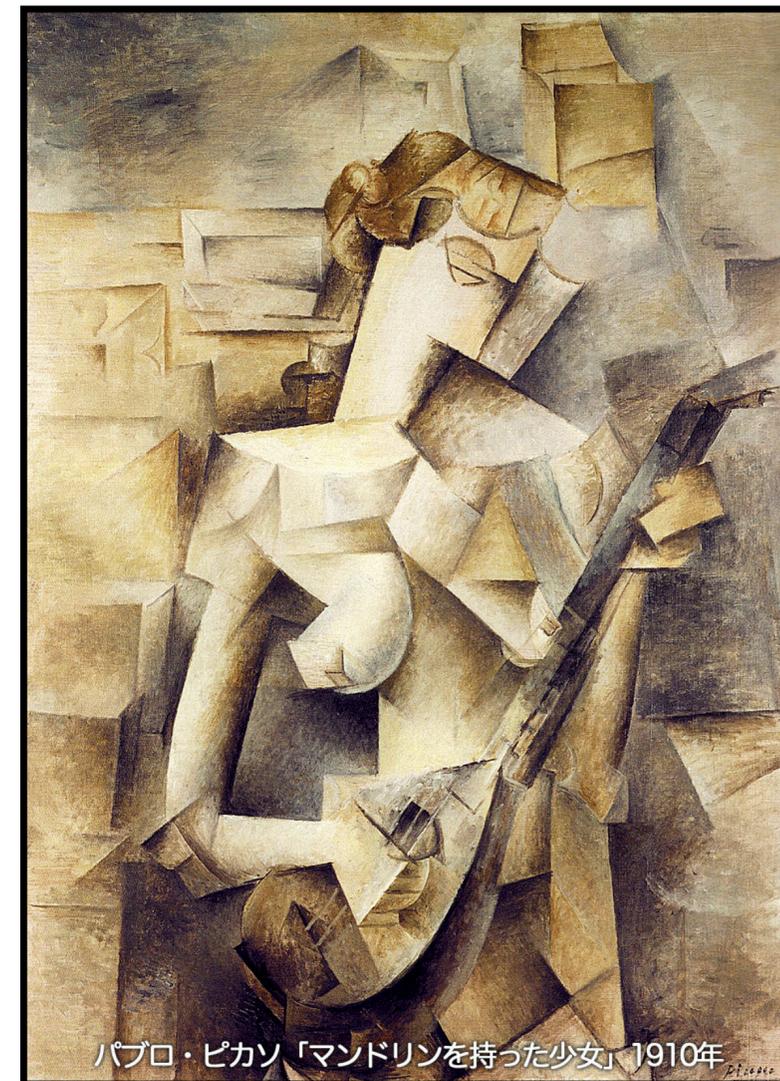
第1章

前衛画家パブロ・ピカソの誕生(19世紀)



ジョルジュ・ブラック
「家々と木」1908年

○ ブラックはセザンヌ的な技法を、よりデフォルメされた幾何学的な風景や人物像のうちに適用した。ブラックはそうした作品をサロン・ドートンヌに出品しようとしたが、審査で落選し、結局ドイツ人画商ダニエル＝ヘンリー・カーンヴァイラーの画廊で開催された個展で展示した。同展を訪問した批評家ルイ・ヴォークセルが展覧会評においてブラックの作品のうちに「立体」を見出し揶揄(やゆ・からかうこと)したのをきっかけに、「立体派」(キュビズム)という呼称が定着することになる。



パブロ・ピカソ「マンドリンを持った少女」1910年

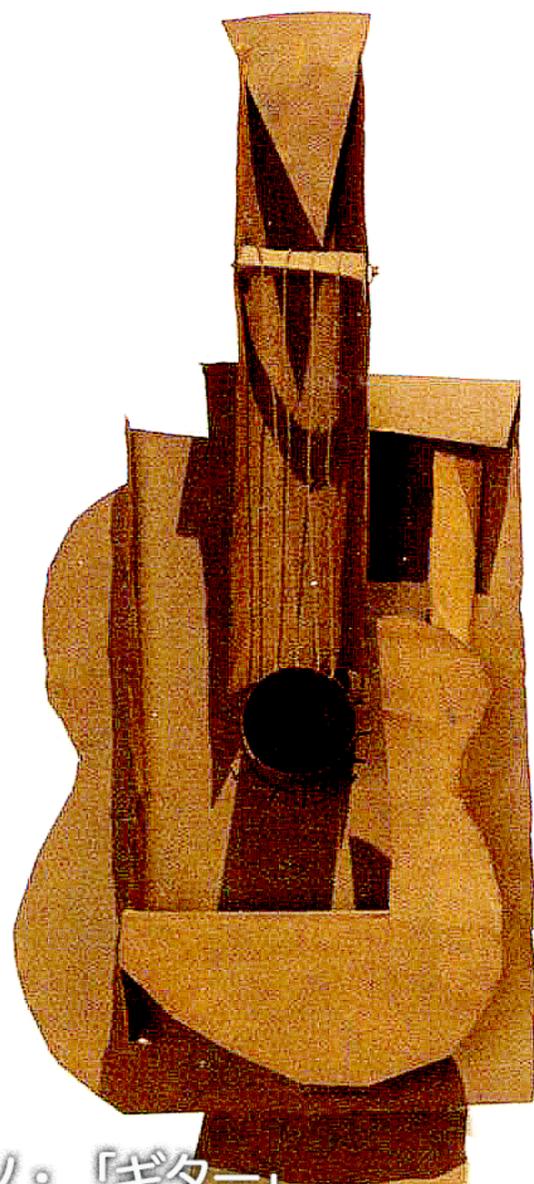
○ ジョルジュ・ブラック (家々と木) 1908年・・・個展に展示された作品の一つ。図式化されたモチーフのそれぞれの面は構成的筆触で彩られ、部分的にパサージュが施されることで、謎めいた空間構成となっている。このため幾何学的な印象が強いこの作品のなかに、実際には厳密な幾何学的な整合性を見出すことができないという矛盾が生じている。

○ パブロ・ピカソ (マンドリンを持った少女) 1910年・・・線による解体を推し進めた分析的キュビズムの作品だが、浅浮き彫りのような空間からは、華奢(きゃしゃ)な体つきと豊かな胸を持つマンドリン奏者のシルエットが浮かび上がっている。独特の情緒を湛(たた)えたこの絵画は、1909年のサロン・ドートンヌで展示されたバルビゾン派の画家カミーユ・コローの人物画から着想を得ているとされる。

第1章

前衛画家パブロ・ピカソの誕生(19世紀後半)

ピカソが解体しようとしたのは、形態や素材と現実の事物との慣習的な関係だけではない。1913年末以降には、新印象派の画家たちが光の効果をもたらすために生み出した色彩分割の技法もまた、キュビズム的な実験の素材にした。ピカソが自らの絵画や彫刻に施した、新印象派的な点描は、光を表す記号として導入される場合もあれば、服や壁紙の装飾的な模様として描かれている場合もある。



ピカソ。「ギター」
(コンストラクション)1914年

○ ピパブロ・ピカソ

〈ギター〉 (コンストラクション) 1914

年・・・通常であれば凹状の丸い穴として表現されるべき部分は凸状の筒で表現され、輪郭は途切れ途切れである。だが全体を見れば、ギターの一部であると認識できる。細部は似ていなくても部分と全体との関係のなかで総合的に対象が何なのかを知覚する私たちの認識のメカニズムを、ピカソはアフリカの仮面の構造的な分析から得た。



LE JOU
ピカソ「ギターとグラス」1902年

○ パブロ・ピカソ 《ギターとグラス》 1912年・・・壁紙をベースに、新聞紙や色臥木目を模した紙、楽譜の一部、ピカソによるコップの素描が貼られている。本作品は、奥行きにも再現性にも欠けていながら、それでもなお、私たちに**ギターやグラスの存在を認識**させる。また、新聞が置かれたテーブルを前にしながら**音楽が奏でられるのを聴いている情景を想像**することもできる。そのような想像を可能にするものが何なのか、問いかけているようだ。

第1章

画家ジョルジュ・ブラック

早熟な若者を刺激した前衛



ジョルジュ・ブラック
「マンドリンを持つ女」1910年

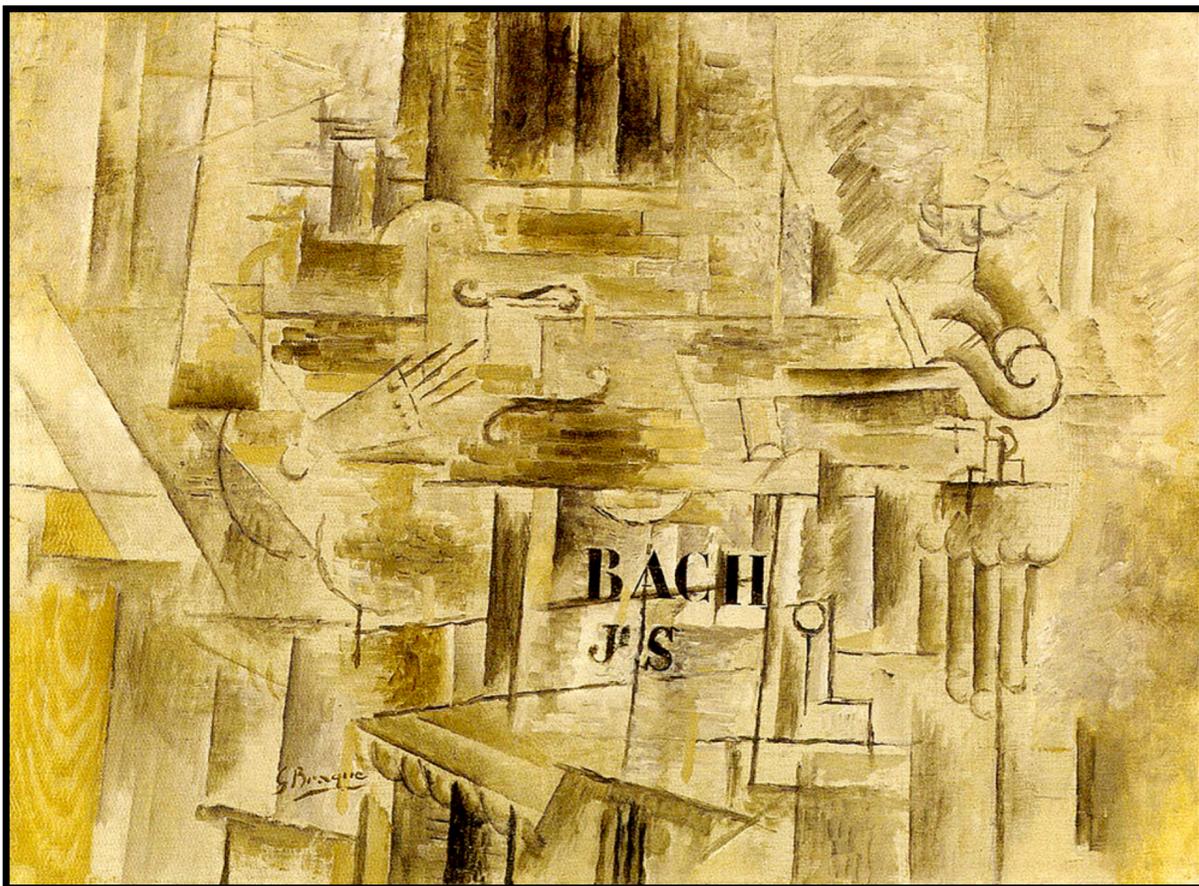
○「レジュ・ブラック
（マンドリンを持つ
女）」1910年・・・ブラ
ックが初めて楕円形の
カンヴァスを使用して制
作した分析的キュビス
ムの人物画。モチーフ
の幾何学的解体に伴
い、その周囲（とりわ
け四隅）に余白ができ
るために、楕円形を導
入したと考えられる。
他方では、楕円形に枠
取られた肖像画が流行
したロココ時代の絵画
のパロディーとしても解
釈できる。ピカソもま
たこの取り組みに触発
され、1912年には楕円
形の絵画を制作してい
る。



ピカソ
《ヴァイオリン、ガラス、パイプ、インク壺》
1912年

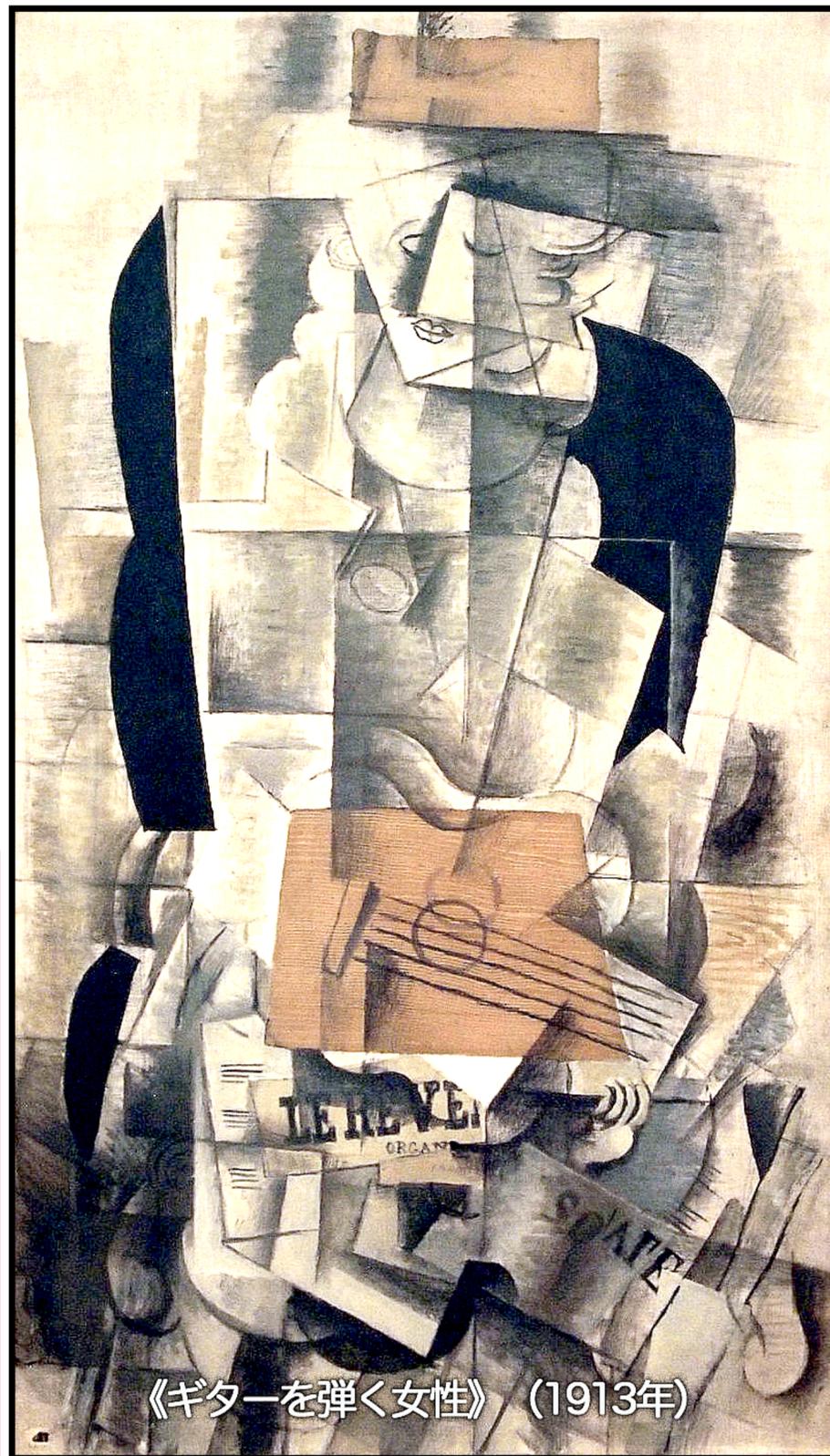
第1章

画家ジョルジュ・ブラック



○ ジョルジュ・ブラック《JS・バッハへのオマージュ》

1911-1912年・・・当時室内装飾にしばしば使用されていた木目模様を、分析的キュビズム様式で描かれた静物のなかに忍び込ませるこの絵画は、あたかも**装飾画家**として訓練を受けた作者ブラックの過去を告白するかのようだ。他方では、解体されたヴァイオリンから、**バロック音楽の作曲家バッハの名を綴るタイポグラフィ**が浮かび上がり、**キュビズムの実践が音楽的な抽象性を追求するものであることが示唆**されている。この作品は、高級芸術と低級芸術という、相反する文化的背景からキュビズムが生まれたことを示しているのである。



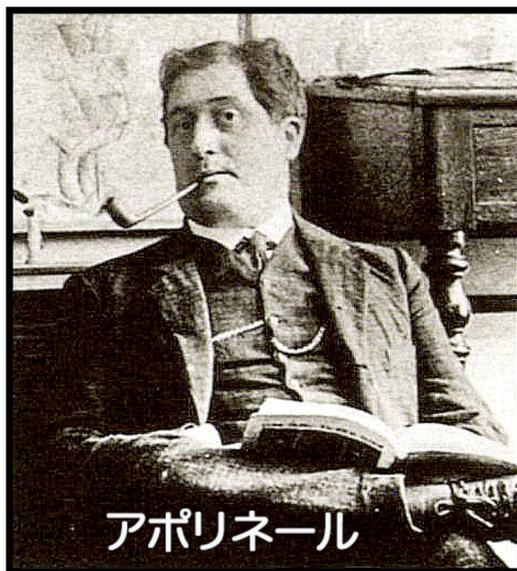
《ギターを弾く女性》(1913年)

○ ブラックはコラージュの断片を論理的に用いており、大部分は写実的に使っていた。それに対してピカソのコラージュは、断片をつじつまの合わない使い方を楽しみ、ひとつの物を別の物に転化させたり、新しくつなぎ合わせたものの形から、思いがけない意味を引出したりしていた。この**ピカソのコラージュが、後年シュルレアリスムの画家たちに慕われることになった**。ブラックのコラージュには、ピカソのような錬金術的傾向はみられなかった。二人の芸術家の生産的なコラボレーションは続き、**1914年の第一次世界大戦が始まるまで続いたが、1915年5月のカレンシーでの戦いで頭部に重傷を負い、一時的に失明した**。1915年5月、カレンシーでの戦闘で頭部に重傷を負い、一時的に失明した。頭蓋骨に穴があき、**絵画制作を中断し長い療養期間を必要することになった**。

第1章

キュビズム揺籃のアトリエ

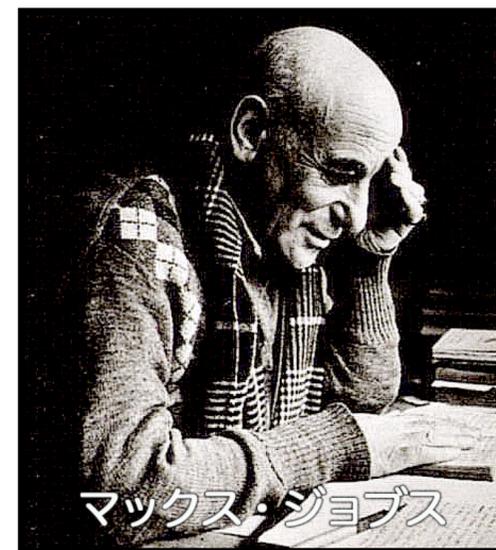
洗濯船の画家と詩人たち



アポリネール



ラヴィニャン通り13番地の建物・「洗濯船」



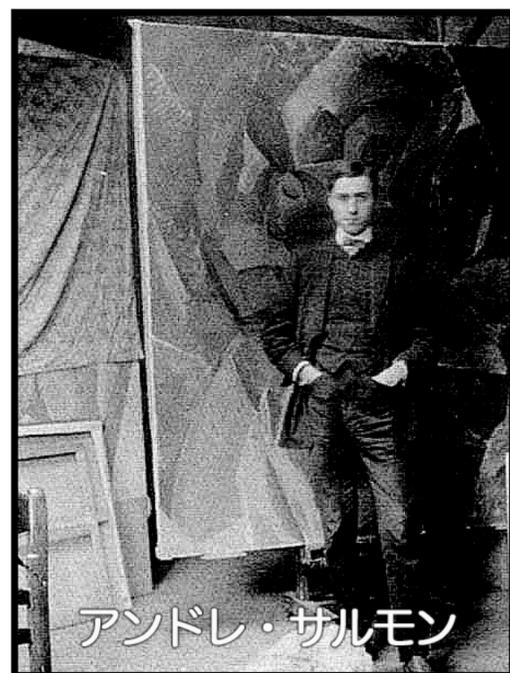
マックス・ジャコブ

○マックス・ジャコブ

(1876-1944)・・・フランスの詩人、小説家。1909年、自室でキリストの出現を体験しカトリックに改宗。**ナチスに逮捕され終戦を待たずして収容所で病死した。**連作散文詩『殿子筒(さいづつ)』は、「キュビズム文学」とも称された。

○アンドレ・サルモン

(1881-1969)・・・フランスの詩人、小説家、美術批評家。アポリネールやピカソらとの交流し、キュビズムの活動にも参加した。回想記「はてしなき回想」では、ピカソやモジリアニら当時の画壇や文壇で活躍したアーティストの素顔を伝えている。



アンドレ・サルモン



ina.fr

○ギヨーム・アポリネール

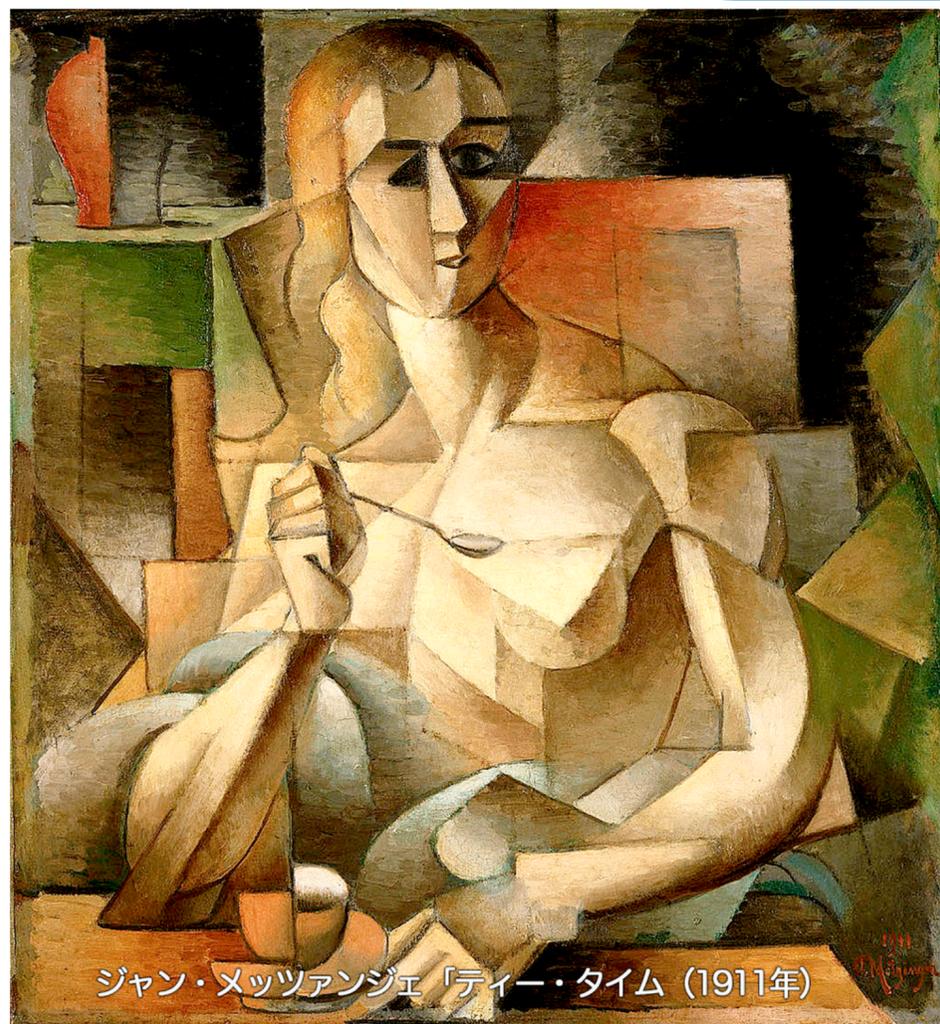
(1880-1918)・・・フランスで活躍した詩人、劇作家、小説家。20世紀初頭の前衛美術の優れた批評家でもあり、キュビズムの擁護者であった。詩集に『アルクール』、『カリグラム』など。第一次世界大戦に従軍し**頭部に銃弾を受ける**も一命を取り留める。1918年11月、**スペイン風邪により急逝した。**

第2章

様々な芸術家たち

アルベール・グレーズ「収穫物の脱穀」1912年国立西洋美術館

キュビズム運動の理論派



○ 1904年から1907年にかけてメッツァンジェは分割主義やフォービズム、ポール・セザンヌの要素を取り入れ、初期キュビズムを先導した。1908年からメッツァンジェは面で形態を表現する実験をはじめ、そのスタイルはすぐにキュビズムとして知られるようになった。キュビズムにおけるメッツァンジェは、影響力のある芸術家であり、同時に**キュビズムの主要な理論家**でもあった。1910年に出版されたメッツァンジェの著書『Note sur la Peinture』で初めて、異なる複数の視点から対象物の周囲を動くように描いていく考えを発表。

○ アルベール・グレーズの「収穫物の脱穀」・・・1912年の作品であり、彼の特徴的なスタイルと視覚的な影響力を強く感じさせる作品です。グレーズは、近代フランスの画家であり、印象派やポスト印象派の影響を受けつつ、自身の独自のアプローチを発展させました。この作品では、彼の典型的な色彩使いや形の処理が際立っています。色彩と光の使い方: グレーズの色彩は非常に豊かで、光の表現が巧みです。脱穀作業を行う農民たちの姿が、鮮やかな色彩と強いコントラストで描かれており、視覚的なインパクトがあります。

第2章

様々な芸術家たち

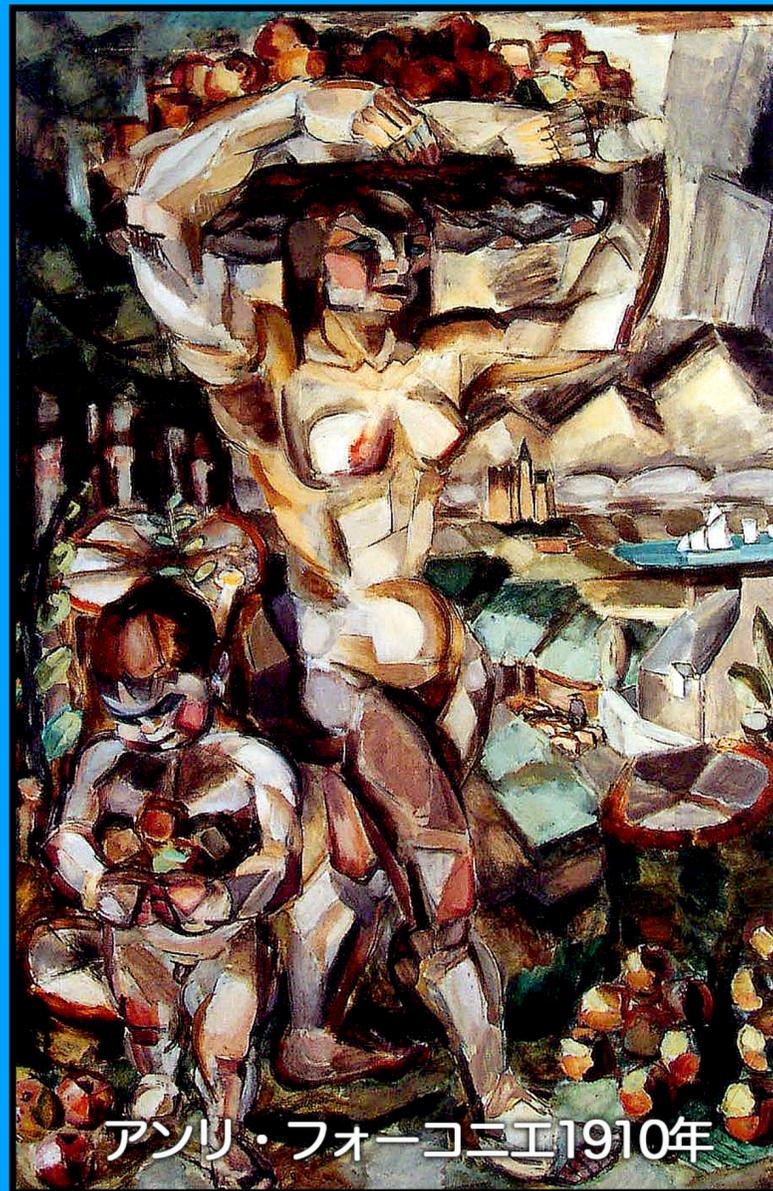
国際的な新世代の巨匠



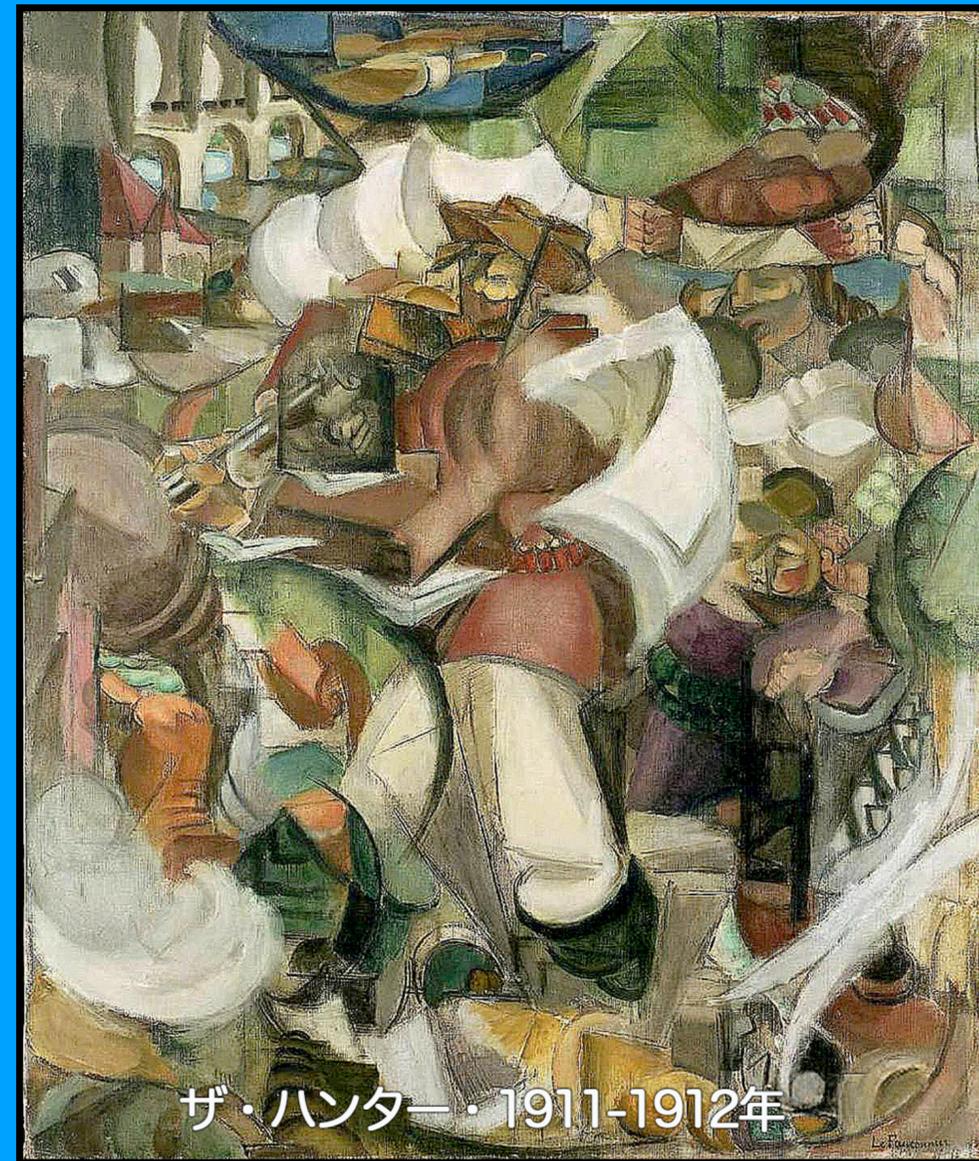
Le Poète Paul Castiaux

○アンリ・ル・フォーコニエ1881年-1946年・・・

フランスの画家である。様々なスタイルの作品を残しているが、キュビズムの画家の一人として最も知られている。1909年にアルベール・グレーズやロベール・ドローネーといった画家と知り合った。**1910年にワシリー・カンディンスキーに招待**されてミュンヘン新芸術家協会のメンバーになった。



アンリ・フォーコニエ1910年

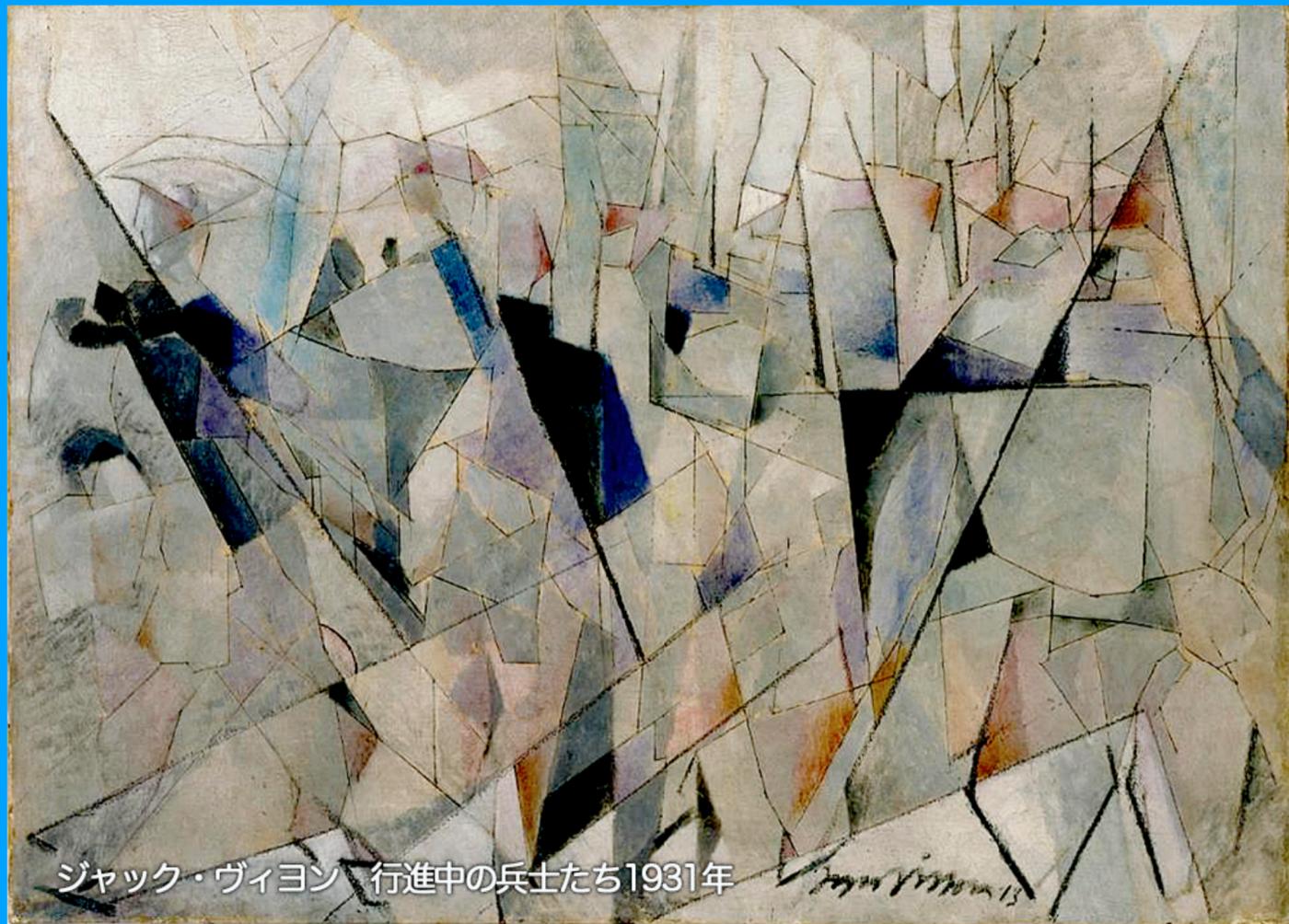


ザ・ハンター・1911-1912年

『狩人』（ハンター、）は、フランスの画家アンリ・ル・フォーコニエが1911年から1912年に制作した絵画。このキャンバスに描かれたキュビズムの油彩は、ハンターを表しています。1912年にサロン・デ・アンデパンダン（Salon des Independents）に展示され、現在はデン・ハーグの市立博物館に収められている。一方、1912年以降の版はニューヨーク近代美術館で見ることができる。

第2章

デュシャン一家



ジャック・ヴィヨン 行進中の兵士たち1931年



レイモン・デュシャン=ヴィヨン (1876-1918)

《大きな馬》1912年

複雑な構成のこの画面の中に、歩く兵士の姿を見出すことは難しい。だが彼は闇雲に線を重ねているわけではない。そこには科学的なイメージが着想源として存在していた。発想としては、弟のマルセル・デュシャンが前年に描いた《階段を降りる裸婦No.2》（フィラデルフィア美術館）ととてもよく似ている。当時デュシャン三兄弟は、生理学者エチエンヌ=ジュール・マーレイ（1830-1904）の連続写真への関心を共有していた。たとえばのようなマーレイのイメージを見れば、ヴィヨンの絵画のなかに繰り返し現れる大きな鋭角が、動いている人間の足を図式的に捉えたものであることが理解できる。

○馬が躍動する様子を表したこのブロンズ彫刻は、**胴体や脚が機械の部品**のような、あるいは**機関車の一部**のような形をしており、馬の力や勢いが強調されています。全体の形はシンプルな**曲線や直線**から成り、本来の馬のもつ温かみや柔らかな感触からは随分かけ離れています。抽象的な表現ですが、空間と人体との関係や、**機械と馬の体**が示す**動きの関連性を形態化**する有機的な着想から制作された作品です。

第2章

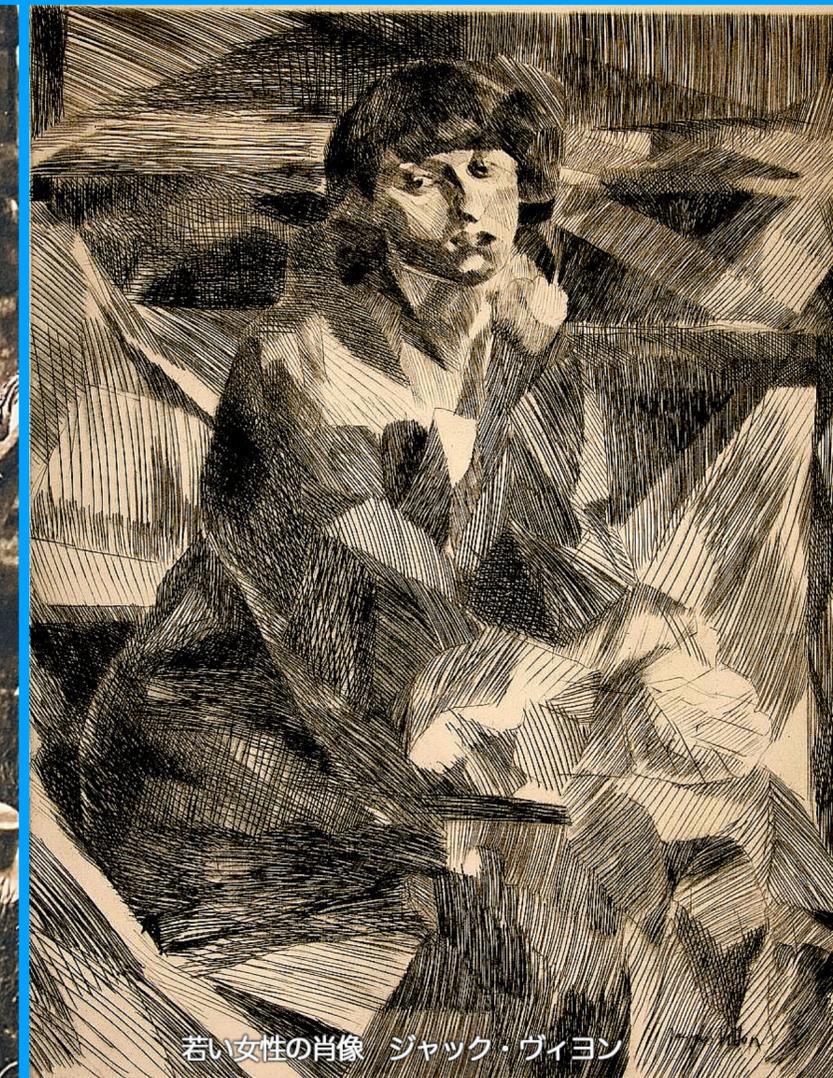
デュシャン一家



マルセル・デュシャン「階段を降りる裸体」1912年



左からマルセル・デュシャン、ジャック・ヴィヨン、レイモン・デュシャン=ヴィヨン



若い女性の肖像 ジャック・ヴィヨン

○**キュビズムの芸術一家**・・・ノルマンディー地方のブルジョワ家庭に生まれたデュシャン兄弟は、素描家の母と版画家の祖父を持ち、幼い頃より芸術に親しむ家庭で育った。キュビズムの画家である**長男のジャック・ヴィヨン**（本名ガストン・エミール・デュシャン）と、キュビズム風の彫刻を制作した**次男のレイモン・デュシャン=ヴィヨン**（本名ピエール=モーリス=レイモン・デュシャン）は、最初はそれぞれ法学と医学を大学で学ぶという口実でパリに上京したのだが、やがて芸術家としての道を志すようになった。1906年にジャックがアトリエ兼居住地を構えたビュトーのルメートル通り七番地に、翌年にはレイモンも越してきた。また見たちを追って芸術家になるべく1904年に上京した**三男マルセル・デュシャン**も、ビュトー近郊のパリ西側に位置するヌイイ=ジェル=セーヌに住むようになった。

第2章

パリ西部のキュビストたち

カンヴァイラー画廊
ピカソやブラック、ドラン、
グリスの作品展示



カンヴァイラー。彼のオフィスにて。後ろにはピカソの絵が飾られている。

アカデミー・ド・ラ・パレット (1888~1912年)
オザンファン、デュノワイエ・ド・スゴンザック、
ロジェ・ド・ラ・フレネーなどが学ぶ

洗濯船
ピカソを囲む芸術家・詩人の集い

ボエシー画廊
第1回・第2回「黄金分割」展会場

アカデミー・ド・ラ・パレット (1912~1925年)
ル・フォーコニエが学長となり、
メッツアンジェ、デュノワイエ・ド・
スゴンザックも教鞭をとる

カフェ・クロズリー・デ・リラ
ル・フォーコニエたちの集い

ピュトーのアトリエ ●
デュシャン兄弟の集い



ピュトーのアトリエ・展覧会

ラ・リュッシュ 蜂の巣
レジェやアーキペンコ、
リップシツ、ザツキン、
シャガールらの居住地



ラ・リュッシュ (蜂の巣)

アカデミー・アンドレ・ロート
ロートが1925年から没年まで教鞭をとる

クレティユ僧院
グレースや
メルスローらの集い



パリ西部のキュビストたちMAP案内



モンマルトルの洗濯船



クロズリー・デ・リラ La Closerie des Lilas フランスの老舗
カフェ・レストラン・ブラスリー。1847年、パリ6区で創業。



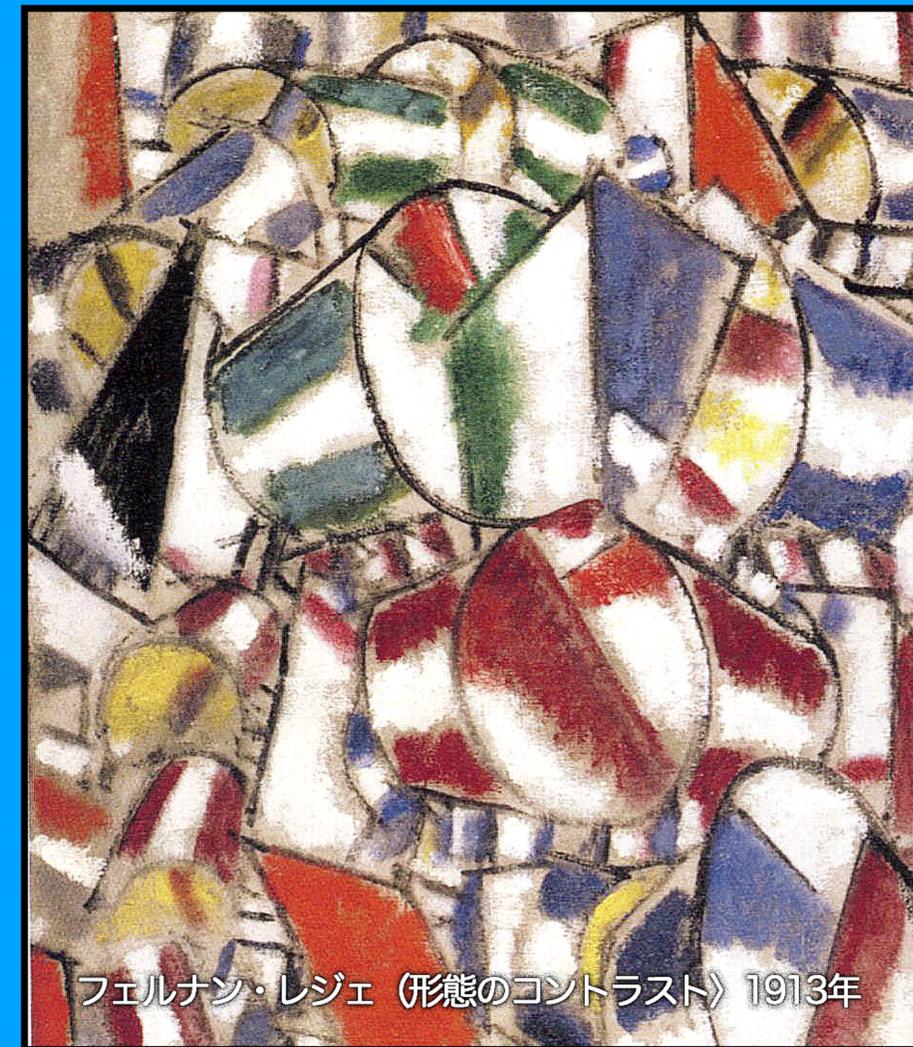
第2章

キュビストと伝統



ジャン・メッツァンジェ 《ティー・タイム(味覚)》
1911年 油彩、厚紙 75.9×70.2cm フィラデルフィア美術館

○「黄金分割」展に出品されたメッツァンジェ 《ティー・タイム(味覚)》 1911・・・まるで工業的な図面のように一つのモチーフを多視点的に分解しつつ、幾何学的な理想美を追求する試みが認められる。この絵画に《モナ・リザ》への現代的なオマージュを認めた批評家ルイ・ヴォークセルは、その展覧会評のなかで、作品を揶揄して「菱形の乳房を持つ《スプーンを持ったジョコンド。》」と呼んだ。



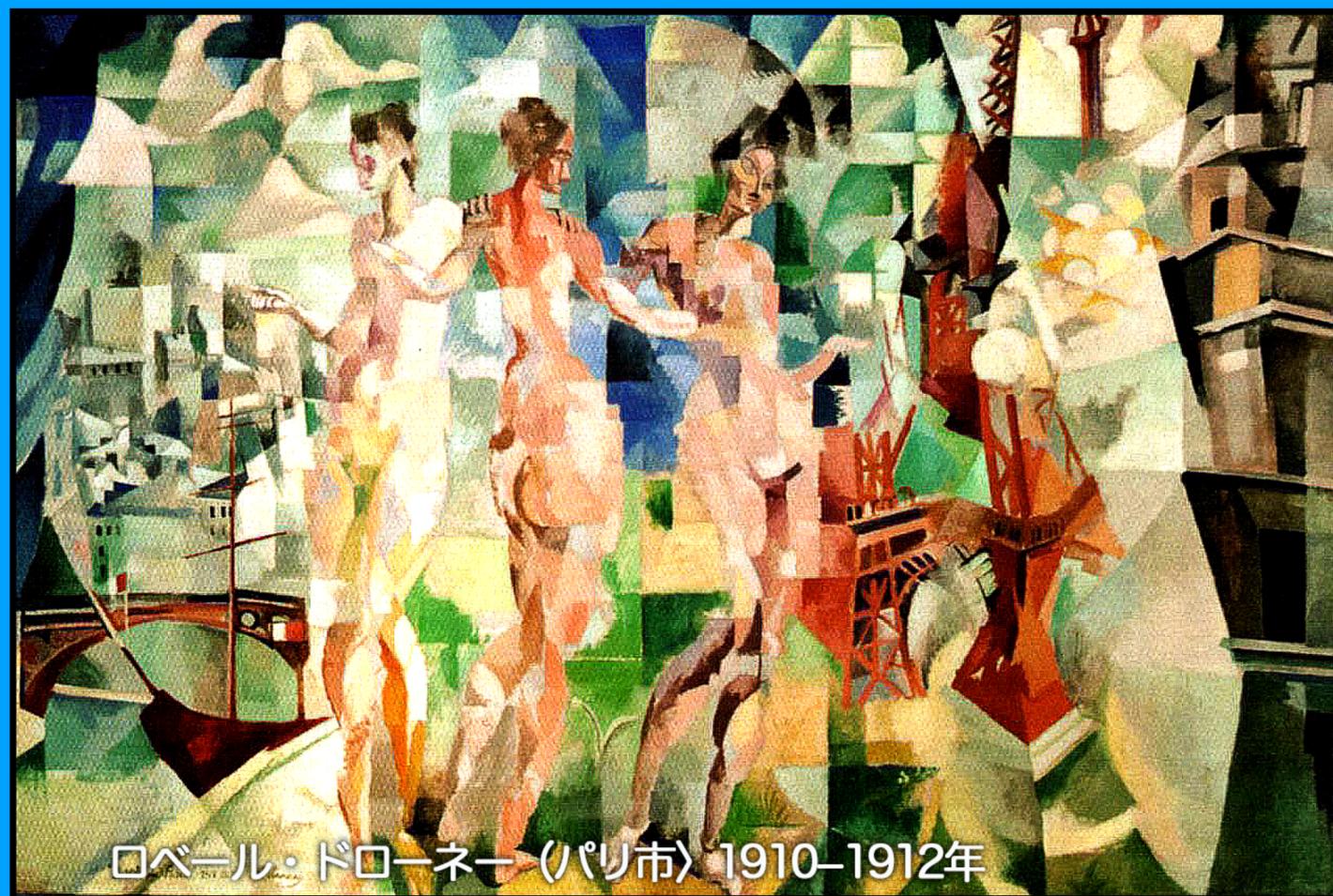
フェルナン・レジェ (形態のコントラスト) 1913年

○フェルナン・レジェ (形態のコントラスト) 1913年・・・円筒形や円錐形に還元されたモチーフを、赤や青、黄色といった原色で彩色するレジェのキュビズム作品は、機械的なリズムに彩られた近代の都市生活を象徴するものであった。当時はこの新たなキュビズム様式を「キュビズム」と呼び揶揄する批評家もいたが、この時期のレジェの作品には主題を完全に排除した「純粹絵画」の萌芽を認めることができる。

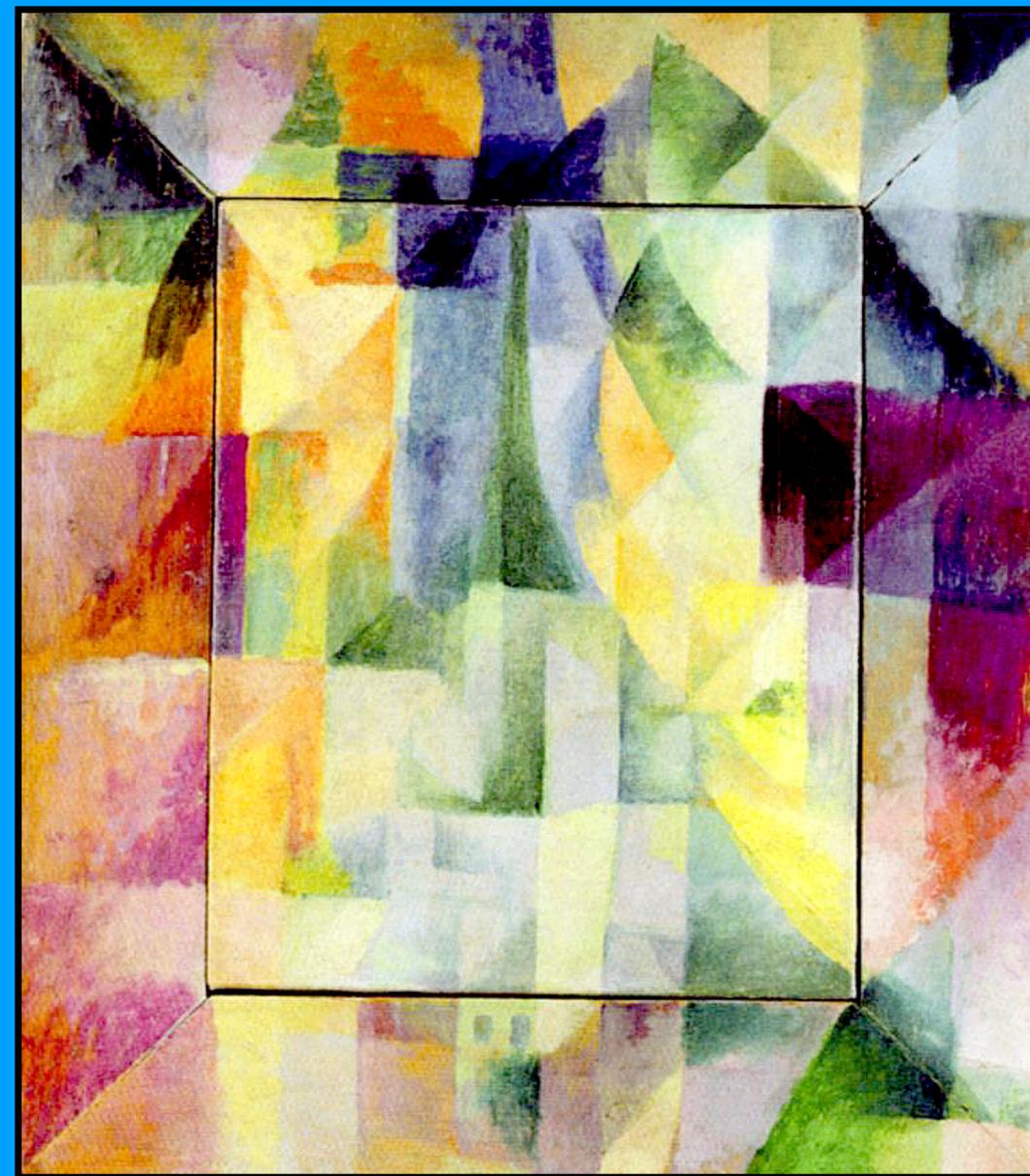
ジョコンドとは「モナ・リザ」という意味。

第2章

ロベール・ドローネ



ロベール・ドローネー（パリ市）1910-1912年

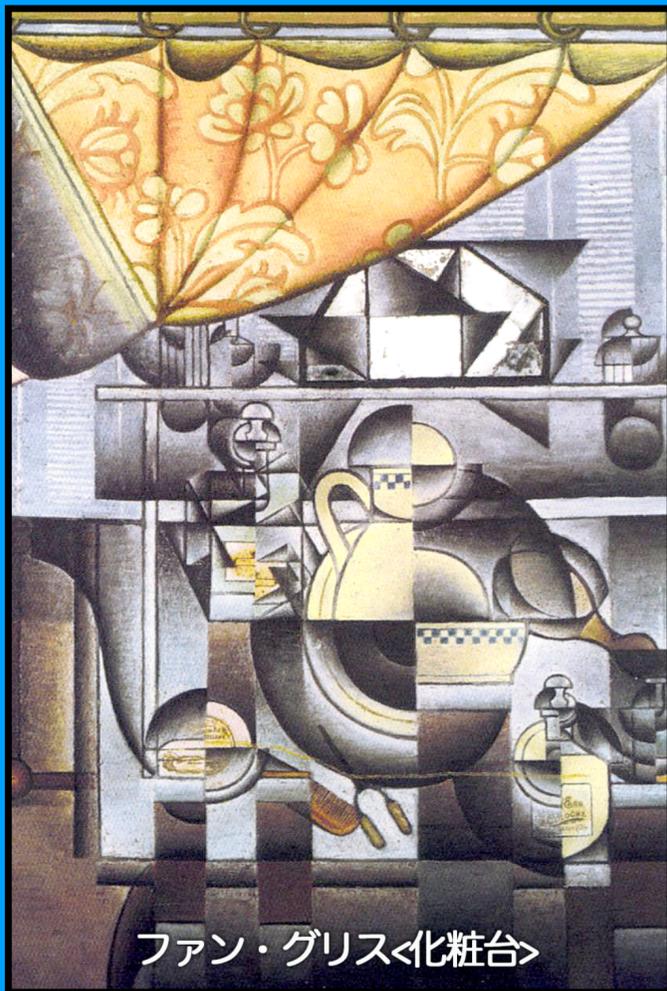


○ **ロベール・ドローネー（パリ市）1910-1912年**・・・パリ中央にいる3人の裸婦は、ギリシア神話の「パリスの審判」の逸話に登場する三美神を想起させるが、彼女たちを取り巻くエッフェル塔や、セーヌ川の汽船は、舞台が現代のパリであることを示している。ここでは古代と現代との調和が描かれるとともに、「パリス」と「パリ」の言葉遊びが暗示されている。

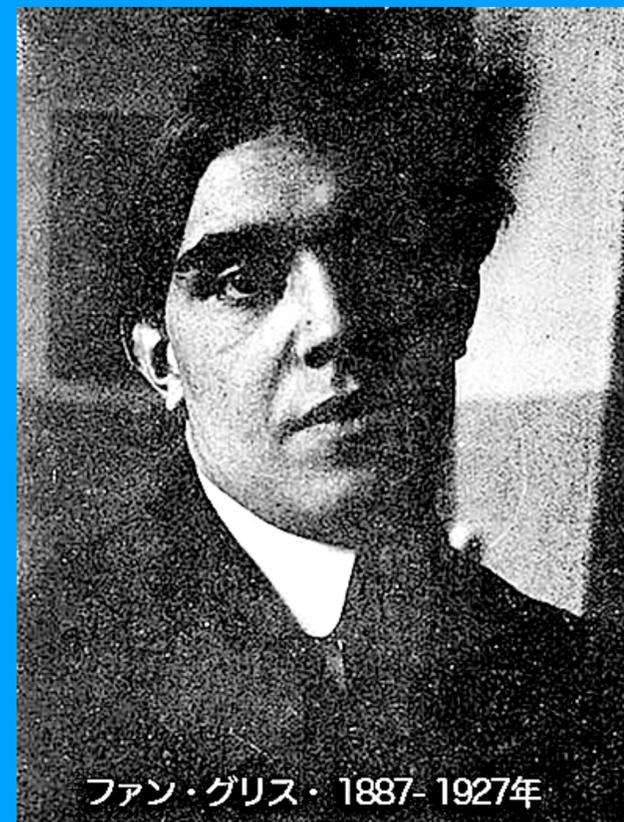
○ **ロベール・ドローネー《街に開かれた同時的窓》1912年**・・・「窓」の内側にはかろうじて緑色に塗られたエッフェル塔を認識できるが、その他の部分は**極度に抽象化**されている。窓枠に相当する額縁の中央下部には、本来であれば風景のなかに存在するべき**建築物の窓が描き込まれている**。彩られた平面と、世界の表象という、**絵画の二重の側面**を、その臨界地点において戯れさせる作品である。

第2章

ファン・グリス



ファン・グリス<化粧台>



ファン・グリス・1887-1927年



ファン・グリス『ピカソの肖像画』, (1912)

○ **ファン・グリス (化粧台) 1912年**・・・1912年の「黄金分割」展への出品作。カンヴァスに直接鏡を貼り付けている点が当時注目された。そこに暗示されているのは、見たままの自然をカンヴァス上に模倣するのであれば鏡を貼るだけで十分であること、また芸術家の仕事の真髄とはむしろ、眼では見ることのできない、事物の幾何学的本質を表す行為のうちにあるということであった。

○ **ファン・グリス (1887年-1927年)** は、マドリード出身の「キュビズム第三の創始者」とも呼ばれる画家です。ピカソとブラックのアトリエの近くに住み、大きな影響を受けました。その描画においては、キュビズムの最大の特徴の1つである画面の細かな分割を基本にして、**黄金分割を重視したり、色彩が反転するような画面構成を意識的に多用しており、見た目や感覚だけではなく理論を重んじていたことがうかがわれます。**メッツァンジェと同様、比較的色彩豊かな色彩を持ち味としており、何がモチーフとなったのかも読み取りやすい構成の仕方が特徴です。**ピカソやブラックらがキュビズムから離れた後も、生涯キュビストとして制作を続けました。**

<https://ja.artsdot.com/@/Auguste-Herbin>

第2章

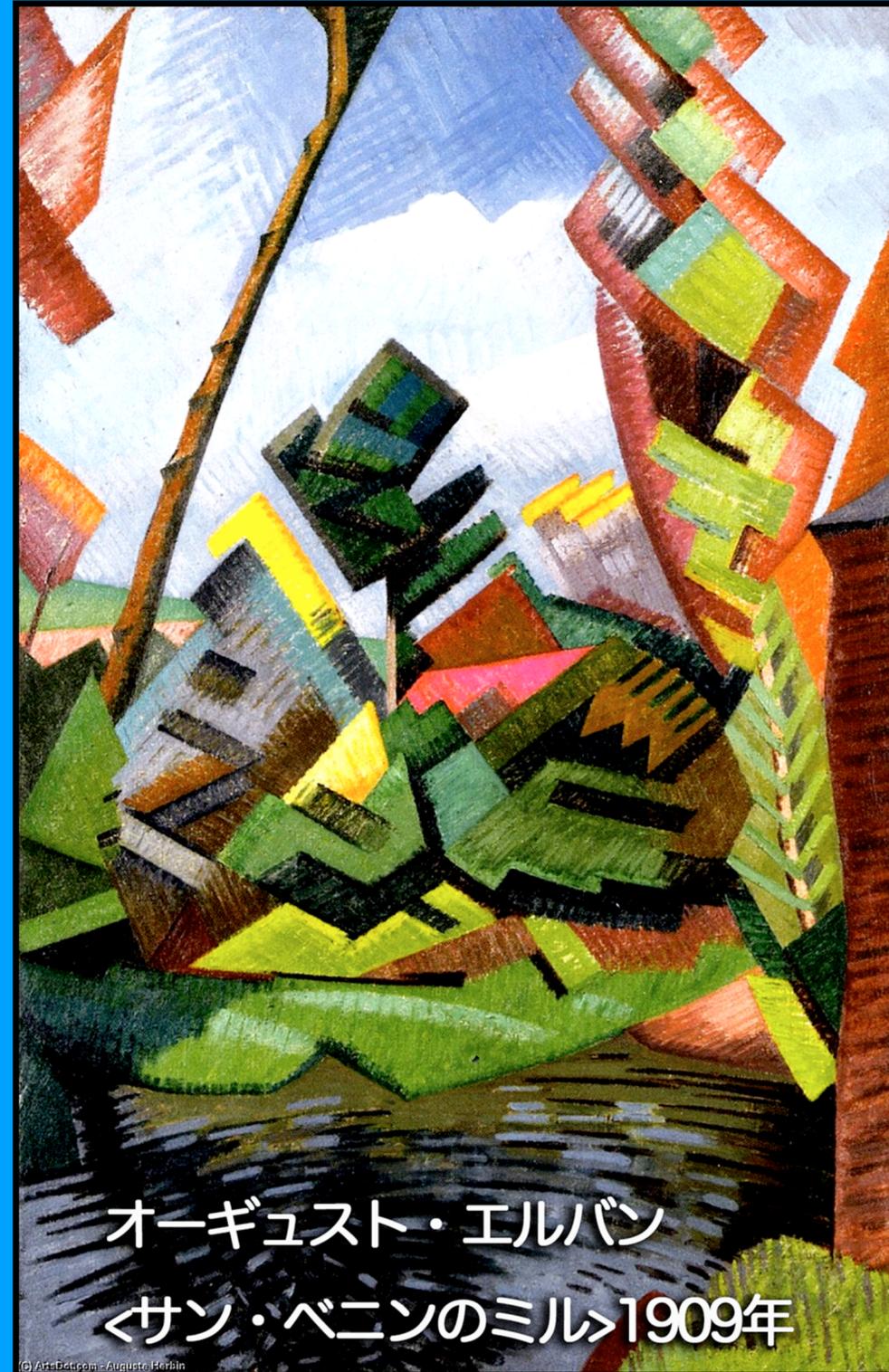
オーギュスト・エルバン



オーギュスト・エルバン・「細道とセレの家」1913年 油彩



オーギュスト・エルバン1860-1882年



オーギュスト・エルバン

<サン・ベニンのミル>1909年

○オーギュスト・エルバン・・・1882年にフランス北部の街キュヴィで生まれた後、カトー＝カンプレジの市民講座で素描を学び、さらにリールの国立美術学校で本格的な美術教育を受けた。1901年からはパリに住み始め、ファン・ゴッホやセザンヌ、次いでフォーヴィズムの影響を受けた絵画を描くようになる。1907年頃の作品には、フォーヴィズム風の鮮やかな色彩のタッチを構成することでキュビズム的な幾何学化を推し進める傾向が認められるようになる。

○オーギュスト・エルバン《細道とセレの家》1913年・・・1913年の南仏セレでの滞在は、エルバンにとって風景画のジャンルでキュビズム的実験を推し進めるきっかけとなった。半円形などの幾何学的図形の反復、直線による全体の構図の大胆な分割など、概念的に考案された抽象表現が認められる。その一方で、白をハイライトとして導入することで、明るい陽の光が家や地面を照らす戸外の自然の風景を表現している。

第2章

アンドレ・ロート



アンドレ・ロート (デュオニソスの巫女)
1910年



アンドレ・ロート(1885-1962年)



○ **アンドレ・ロート (デュオニソスの巫女) 1910年**・・・古代神話の登場人物が、中世の教会のような尖塔を持つ建築物を背景にして横たわっており、その傍らには扇とトランプという近代的な日常生活の一場を想起させるモチーフが描かれている。古代と中世、そして現代、あるいは自然と文明が混じり合うこの光景を、ロートはキュビズム風の色面構成と幾何学的な構図によって描いた。

第2章

キュビズムの彫刻家

アレクサンダー・アーキペンコ



○アレクサンダー・アーキペンコ（カルーセル・ピエロ）
1913年・・・アーキペンコはしばしば、彫刻作品や絵画作品において円錐状の胴体で人物を表現した。その一つである本作は、当時パリで流行していたメドラノ・サーカス団の催しで見たピエロを表現したものであり、**抽象的な形態と色彩を特徴**としながらも、動きに溢れた作品となっている。

オシップ・ザッキン

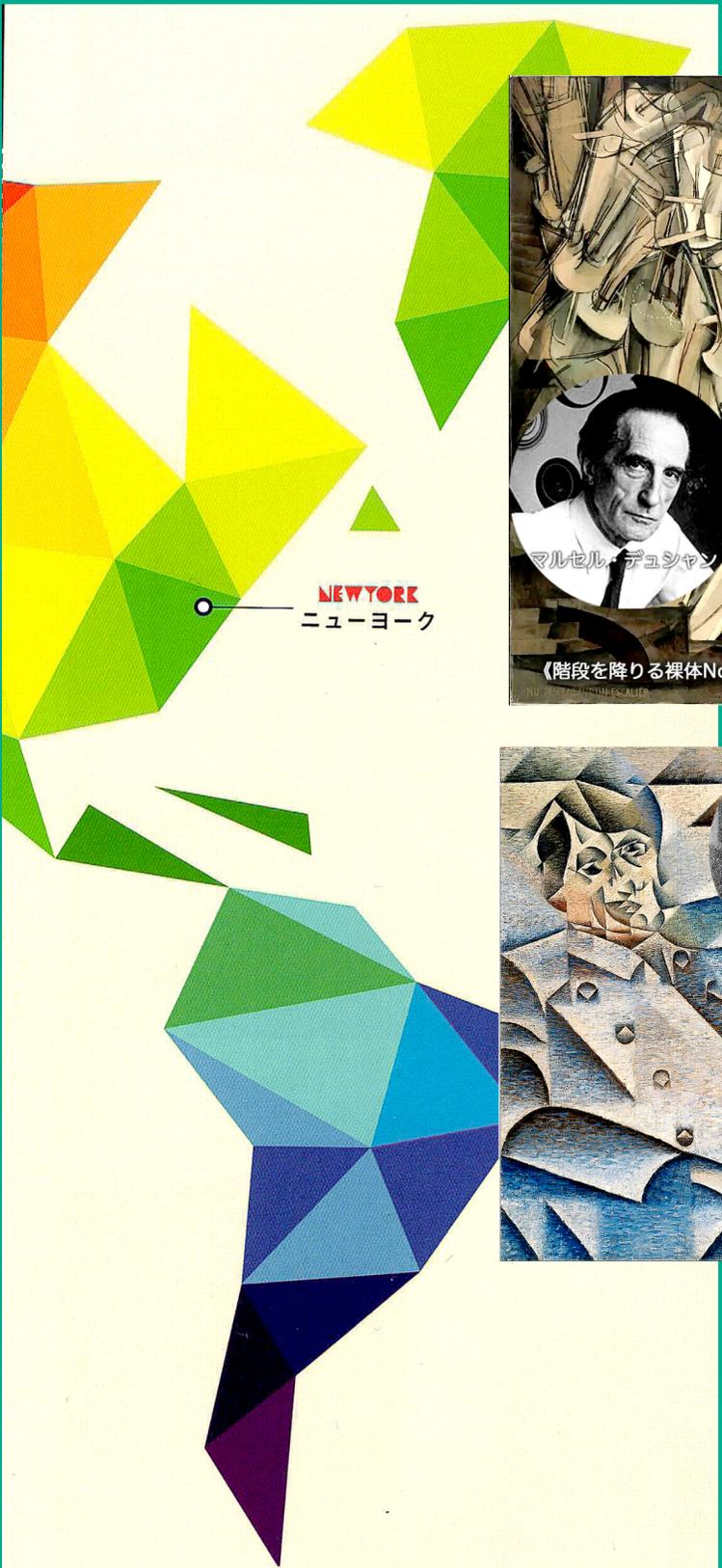


オシップ・ザッキン<彫刻家>1922年

○オシップ・ザッキン
〈彫刻家〉1922年
(1949年) 大理石、花高岩、石、鉛、彩色されたガラス67×55×45cm
国立近代美術館・・・彫刻家の頭部と腕は切り離されていることから、ここで中心的なテーマとなっているのが、彫刻家の姿というよりもその技であることがわかる。本作でザッキンが使用しているのは大理石と花崗岩、石、鉛、ガラスなどといった多様な素材であり、ガラスや台座には線描も認められる。彫刻が絵画との対話のなかで多様な形式を生み出しうることが示唆されている。

第3章

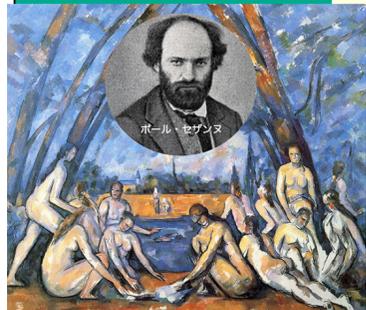
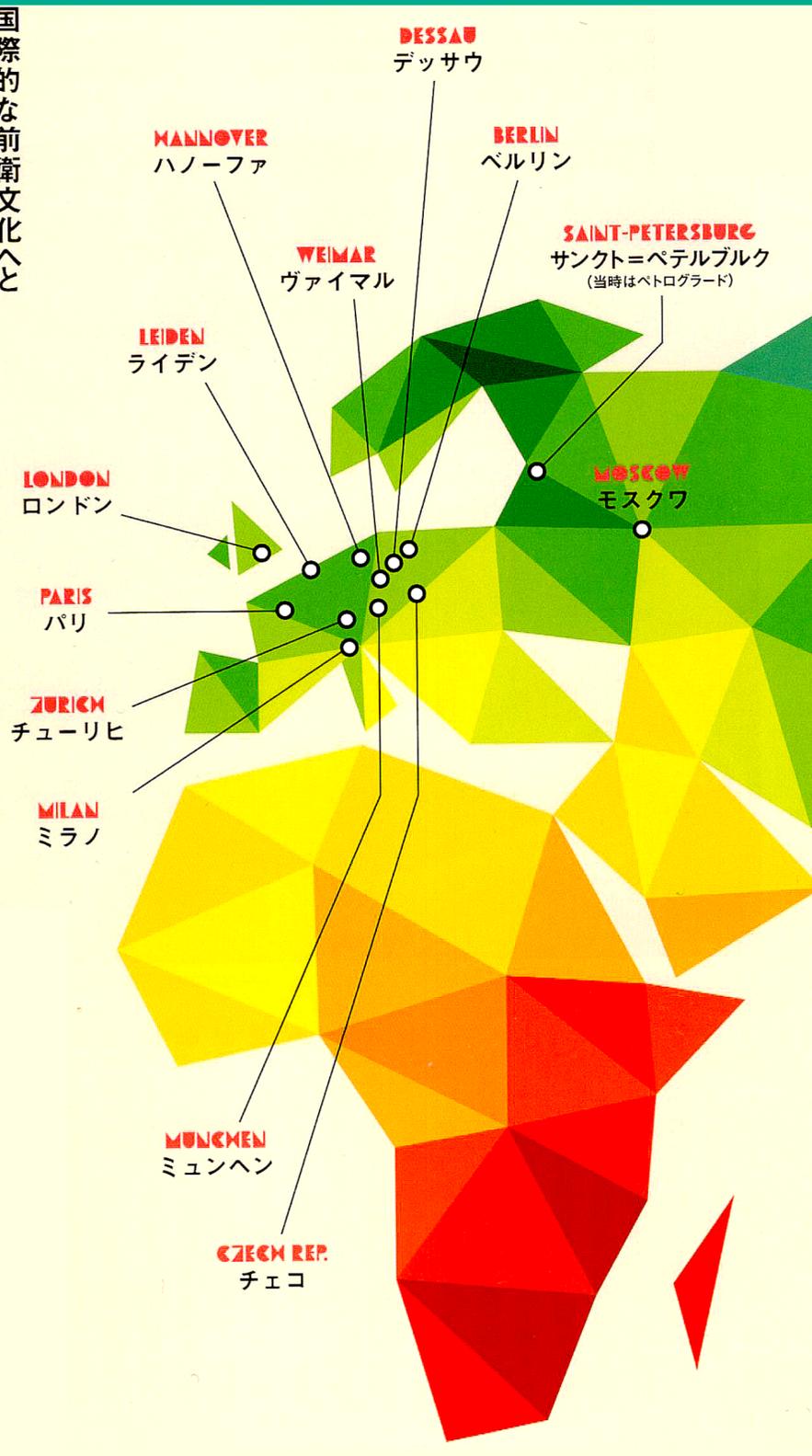
キュビズムの普及と多様化



世界のキュビズム作家たち

作家名	活動期間
ポール・セザンヌ	1839-1906
アリス・バイ	1872-1938
ピート・モンドリアン	1872-1944
ジャック・ヴィヨン	1875-1963
レイモン・デュシャン=ヴィヨン	1876-1918
カジミール・マレーヴィチ	1878-1935
ジャン・クロッティ	1878-1958
レオポルド・シュルヴァージュ	1879-1968
フランツ・マルク	1880-1916
ヨゼフ・ゴチャール	1880-1945
アンドレ・ドラク	1880-1954
ヨゼフ・ホホール	1880-1956
マリア・ブランチャール	1881-1932
アンリ・フォーコニエ	1881-1946
アルベール・グレーズ	1881-1953
フェルナン・レジェ	1881-1955
セルジュ・フェラ	1881-1958
マックス・ウェーバー	1881-1961
ナタリア・ゴンチャロヴァ	1881-1962
ミハイル・ラリオノフ	1881-1964
バプロ・ピカソ	1881-1973
パーシー・ウィングダム・ルイス	1882-1957
オーギュスト・エルバン	1882-1960
ジョルジュ・ブラック	1882-1963
ジャン・メッツァンジェ	1883-1956
マリー・ローランサン	1883-1956
アンリ・ヴァランシ	1883-1960
ジーノ・セヴェリーニ	1883-1966
ボフミル・クビシュタ	1884-1918
ジュリエット・ロシユ	1884-1980
萬鉄五郎	1885-1927
ロベール・ドローネー	1885-1941
エレヌ・エッティンゲン	1885-1950
ウラジミール・タトリン	1885-1953
アンリ・ローランス	1885-1954
アンドレ・ロート	1885-1962
ソニア・ドローネー	1885-1979
ディエゴ・リベラ	1886-1957
アメデ・オザンファン	1886-1966
フアン・グリス	1887-1927
クルト・シュヴィッターズ	1887-1948
アレクサンダー・アーキベンコ	1887-1964
ル・コルビュジエ	1887-1965
マルセル・デュシャン	1887-1968
オシップ・ザツキン	1888-1967
ジョゼフ・チャーキ	1888-1971
リュボーフィ・ボボワ	1889-1924
エドワード・ワズワース	1889-1949
坂田一男	1889-1956
シュザンヌ・デュシャン	1889-1963
スタントン・マクドナルド=ライト	1890-1973
フォルチュナート・デペロ	1892-1960
タマラ・ド・レンピッカ	1898-1980
セルジュ・ポリアコフ	1900-1969
ナディア・レジェ	1904-1982
山本敬輔	1911-1963

国際的な前衛文化へと
受け継がれたキュビズムの真髄



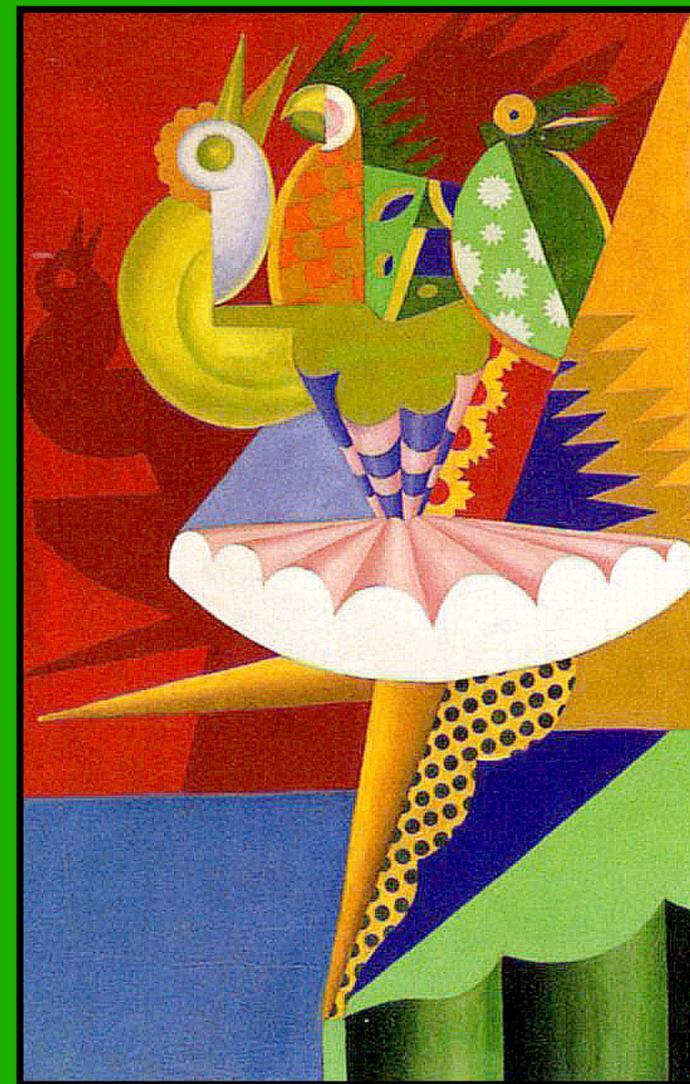
第3章

キュビズムとイタリアの前衛

○ **未来派のキュビズムへの接近**・・・1909年にイタリアの詩人フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティが発表した「未来派宣言」以降、マリネッティの周囲には機械的なダイナミズムを取り入れた芸術表現に共通の関心を持つ芸術家が集い、未来派のグループが形成された。キュビズムと未来派は互いに関心を持ち刺激を与え合いながら、決して一つに結合することのないライバル同志でもあった。

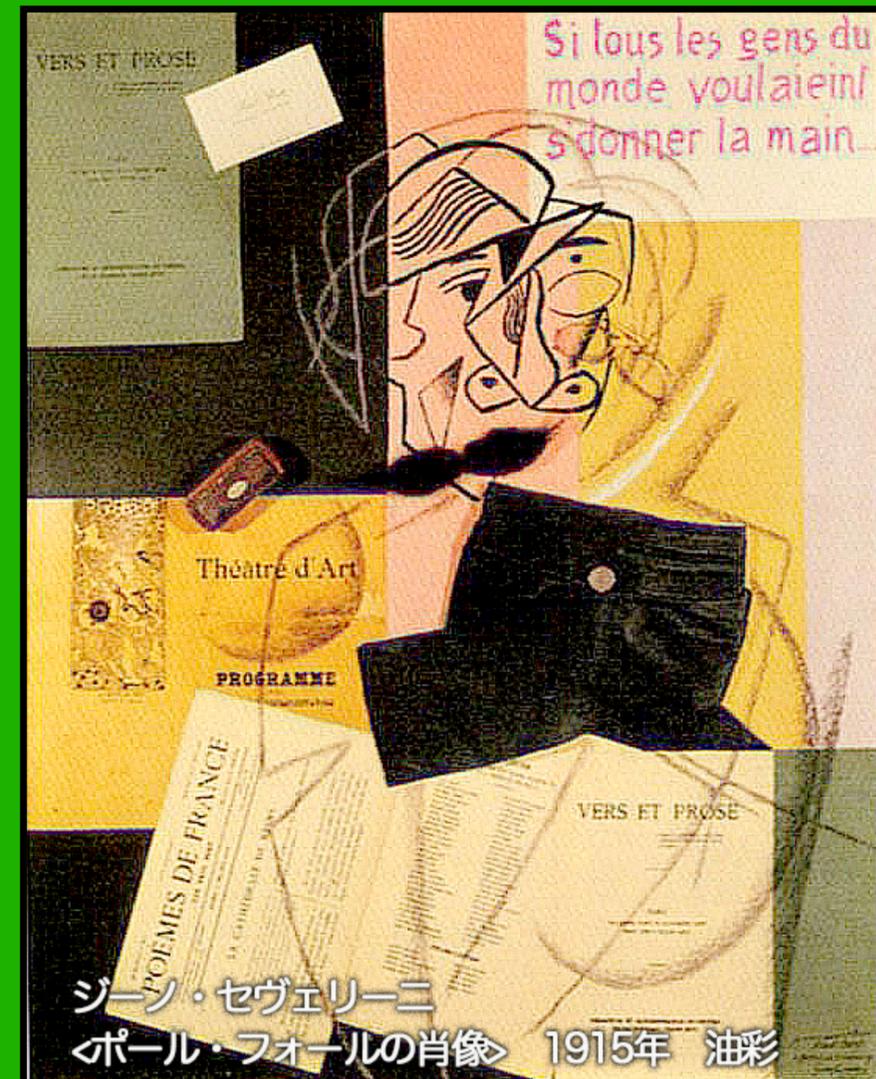
○ ジーノ・セヴェリーニ

《**ポール・フォールの肖像**》1915年・・・カンヴァスに紙を貼り付けるコラージュの手法を取り入れ、画面全体を幾何学的に構成したこの作品には、キュビズムからの影響が認められる。モデルとなった詩人ポール・フォールはモンパルナスのカフェ、クロズリー・デ・リラの集いの中心的な人物である。セヴェリーニはそこに集ったキュビストたちと日常的に交流した。



○ フォルチュナート・デペロ 《バレリーナとオウムの回転》

1917・・・鮮やかな色で彩られた円錐形を胴部や脚とする機械仕掛けの人形を描く本作には、1914年にローマで開催された「国際自由未来派展」で展示されたアーキペニコの作品からの影響が顕著に認められる。デペロは同時期に、幾何学的な部分から構成されたマリオネットによる「造形バレエ」を構想しており、本作もその関連作であると考えられる。



ジーノ・セヴェリーニ
《ポール・フォールの肖像》 1915年 油彩

第3章

キュビズムとドイツの前衛



フランツマルク「狐たち」1913年



○ **フランツ・マルク**（狐たち）1913年・・・キュビズムからの影響をうかがわせる、格子状に分割された画面のなかから、穏やかな顔の狐が浮かび上がる。柔らかい絵の具のタッチと曲線により表現された狐の身体は、幾何学的に分析されてはいても、体を丸めたその肢体や尻尾の膨らみをありありと感じさせる。

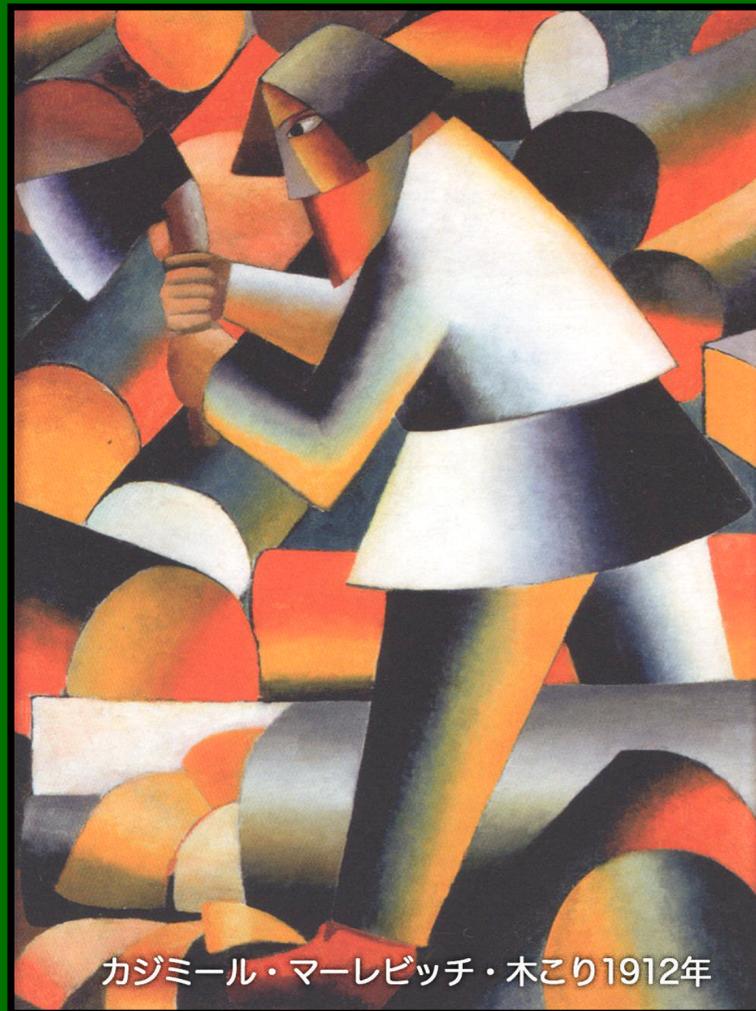


テンプルガーデン パウル・クレイ 1920年

「寺院の庭園」は、1914年4月にマッケとともにチュニジアを訪れたクレイの印象を思い起こさせるようです。水彩画は、晴れた日のステンドガラスの窓のように輝いています。階段はさまざまな庭園のパビリオンのドアに通じ、ヤシの木は高い壁の一部から顔を出し、ドーム型の塔があちこちに立っています。クレイは時々、ハサミで構図を組み替えるのを好みました。おそらくこのとき、作品が対称的すぎると感じたため、3つの部分に切り分け、中央の部分を左に移動しました。「寺院の庭園」に描かれた場所は、以前はケルアンで彼が賞賛した「角と隅」で心地よく満ちていただけでしたが、今では本当に迷路のようになっています。

第3章

キュビズムとロシアの前衛



カジミール・マレーヴィチ・木こり1912年



模型

ウラジミール・タトリン「第三インターナショナル記念塔」



カジミール・マレーヴィチ・モナリザのある構成1914年

○ **カジミール・マレーヴィチ《木こり》1912年**・・・シンプルな幾何学に還元したモチーフを明るい色彩で表現する、レジェのキュビズム作品からの影響が顕著である。描かれているのはロシアの木こりという民衆的モチーフである。初期のマレーヴィチの立体未来派の作品において、「キュビズム」と呼ばれたレジェの技法は、ネオ・プリミティヴィズム的な民衆性とキュビズム絵画とを結び付けるのによってつけた。

○ **カジミール・マレーヴィチ《モナ・リザのある構成》1914年**・・・レオナルド・ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》の複製に赤でXが描き込まれている。それは伝統の否定だけでなく、レオナルドとの結び付きを主張する「黄金分割」展のキュビストたちへの反発の表れでもある。この複製と並置された、矩形や三角形といった単純な幾何学的図形には、すでに絶対主義的な関心が認められる。結果本作品は、総合的キュビズムの作品でありながら、同時にパリのキュビズムへの挑戦ともなっている。

第3章

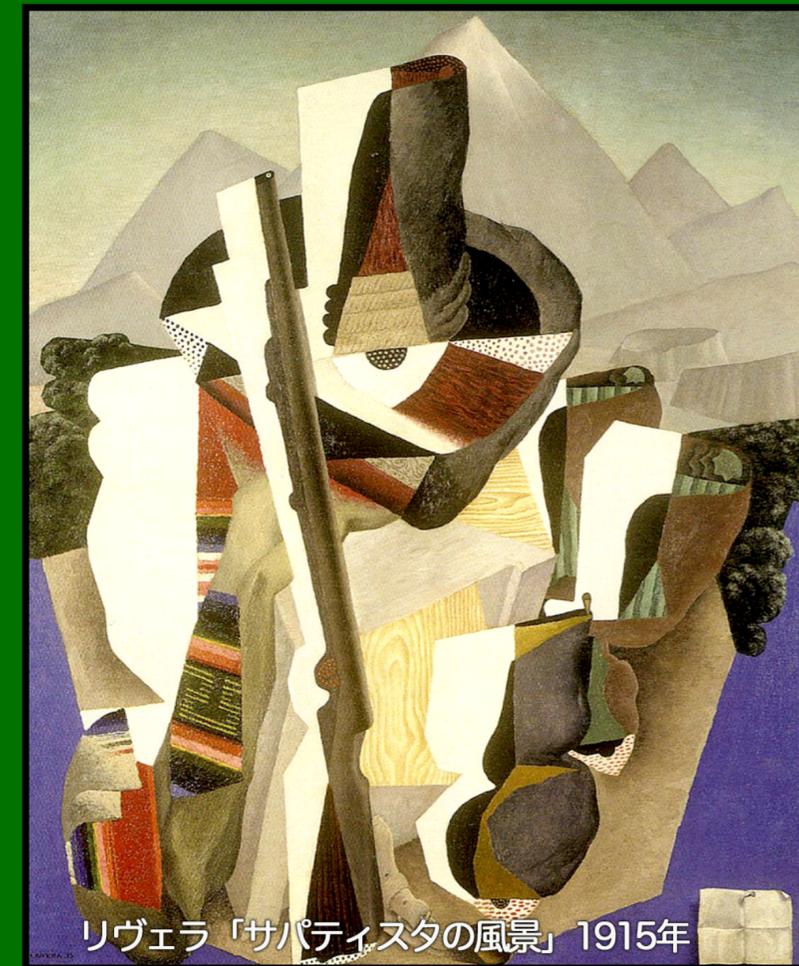
キュビズムのアメリカ大陸上陸



スタントン・マクドナルド・ライト「静物のシンクロミー」



マックス・ウェバー「四次元のインテリア」1913年



リヴェラ「サパティスタの風景」1915年

○ **スタントン・マクドナルド＝ライト**
《静物のシンクロミー》1913年・・・マクドナルド＝ライトとモーガン・ラッセルはパリで出会い、ともにキュビズムや未来派といった前衛芸術から刺激を受けつつ、色彩の構成により音楽的な効果と調和を得ることを目指す**シンクロミズム**を提唱した。本作はテーブルの上の果物など具象的な対象を描くものでありながら、その色づかいと幾何学的構成は純粋な抽象絵画に近いものとなっている。

○ **マックス・ウェーバー** **《四次元のインテリア》**
1913年・・・ウェーバーはキュビズムの幾何学様式を用いて近代的な都市の生活を生き生きと描き出した画家である。本作では、非ユークリッド幾何学との結び付きからモンパルナスのキュビストたちが注目していた「**四次元**」の概念を、**キュビズム的技法と結び付けている**。ウェーバーは、『**カメラ・ワーク**』誌1910年7月号に、この概念についての論考を寄稿している。

○ **ディエゴ・リベラ** **《サパティスタの風景**
ゲリラたち》・・・メキシコ・シテイ山を背景にしたメキシコ革命の指導者サパタを総合的キュビズムの様式で描いた作品。右下のピンで留められた紙は、抽象様式と再現様式との間の奇妙な対話を生み出している。リベラはピカソが《**テーブルにもたれる男**》を制作する際に、自らのこの作品を剽窃(盗作)したと主張し、非難した。

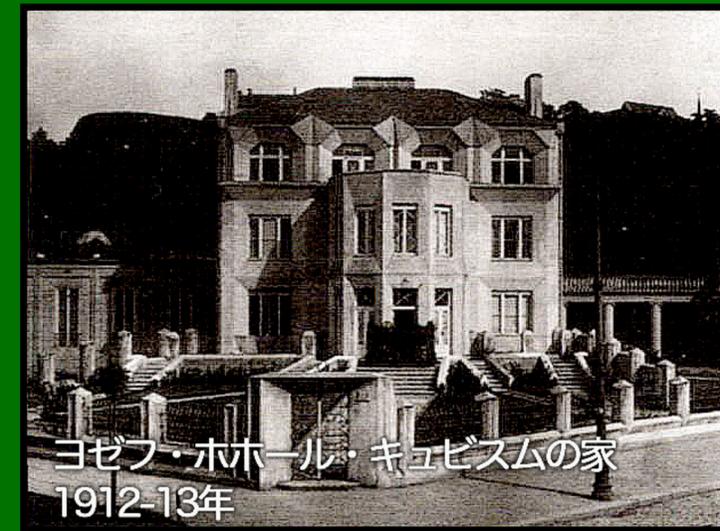
第3章

チェコのキュビズム

○ボフミル・クビシュタ

《死の接吻》 1912

年・・・ボフミル・クビシュタは度々パリを訪れ、キュビズムの最新の動向から学んだ。彼は数学的な分析に魅了され、そのデザインには多くの幾何学的な考察の跡が認められる。完成作は、伝統的な絵画主題をキュビズム風に幾何学化した特徴を持つ。本作も、死神に接吻をされ命を落とすという、キリスト教の新約聖書に起源を持つ図像を描くものである。



○ヨゼフ・ゴチャール「黒い聖母の家」(プラハ)に展示されたゴチャールの家具(1913年)

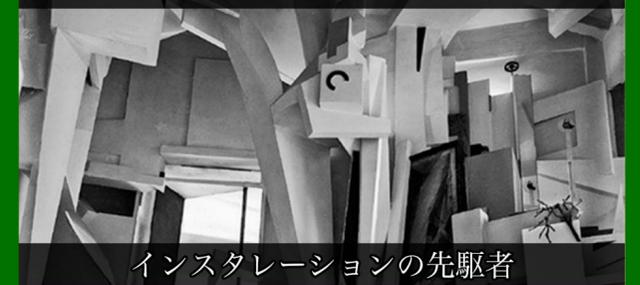
・・・2点ともゴチャールの代表作は、キュビズム建築「黒い聖母の家」と、そのなかの家具である。建築や家具は元来、幾何学的な構造を持つ。だがキュビズムはそこに、光のプリズムや結晶のような複雑な幾何学的装飾をもたらした。こうしたデザインには、デュシャン=ヴィヨンが「キュビズムの家」のために提案したファサード(建築正面部)からの影響が認められる。

ボフミル・クビシュタ「死の接吻」1912年

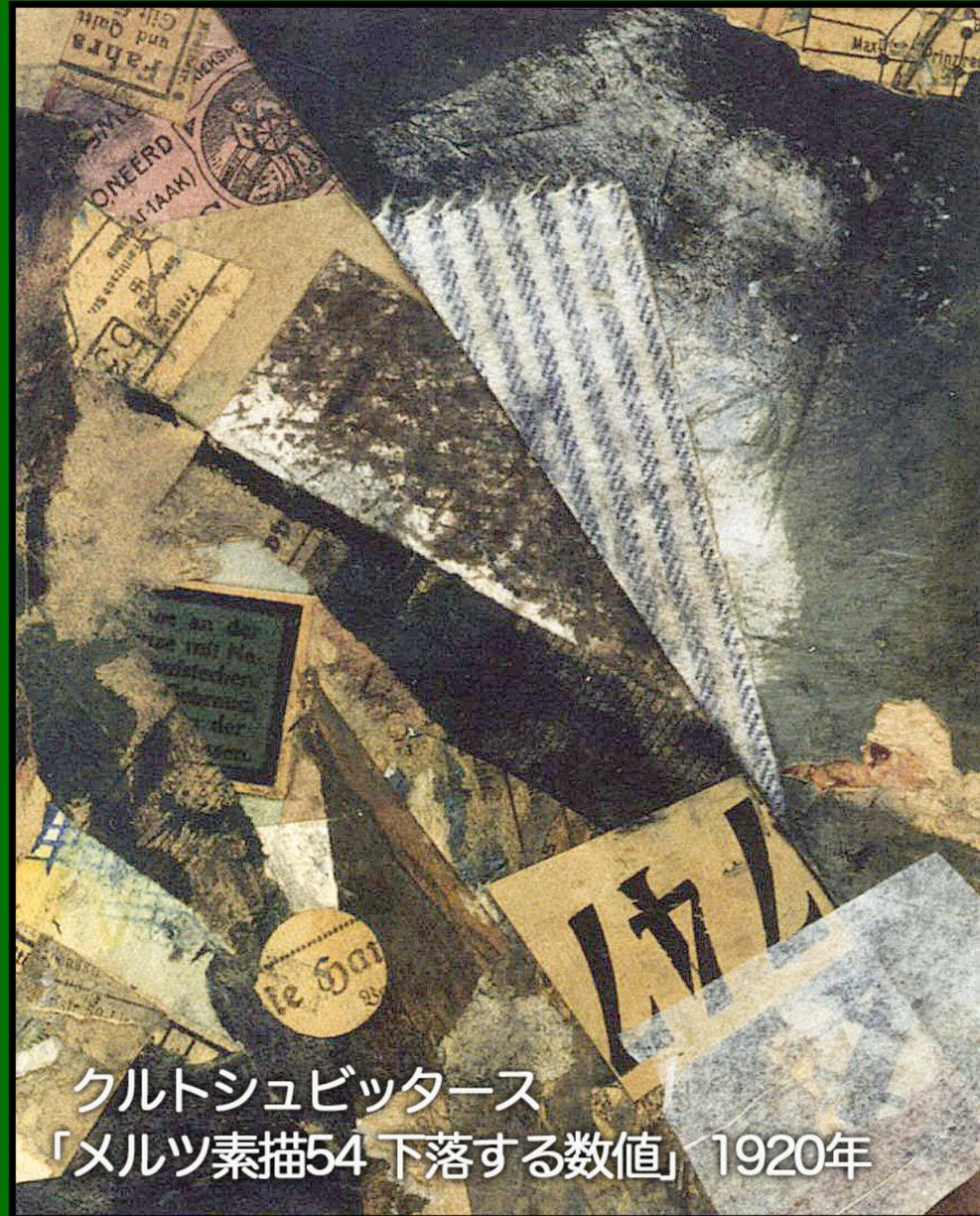
第3章

キュビズムとダダ

3分でわかるシュヴィッターズ



インスタレーションの先駆者



クルトシュビッターズ
「メルツ素描54 下落する数值」1920年

○クルト・シュヴィッターズ（メルツ素描54 下落する数值）1920年・・・ハノーファ・タグの芸術家シュヴィッターズは、1919年に、「商業（Kommerz）」の語尾から「メルツ（merz）」という文字列を抜き出し作品に取り入れるようになった。これが「メルツ絵画」の誕生である。戦後ドイツの貧困を象徴するような瓦礫や残余物から新しい造形を生み出すその手法は、後に建築的な作品群「**メルツbau**」へと発展した。



○クルト・シュヴィッターズは1887年にハノーバーで生まれ、ドレスデン美術アカデミーを含むさまざまな機関で通常の教育課程を修了しました。1915年に従妹のヘルマと結婚し、1917年に健康上の理由で除隊するまで、短期間、聖職者として軍務に就きました。生涯を通じて断続的にてんかん発作に悩まされました。



第3章

デ・ステイルとキュビズム

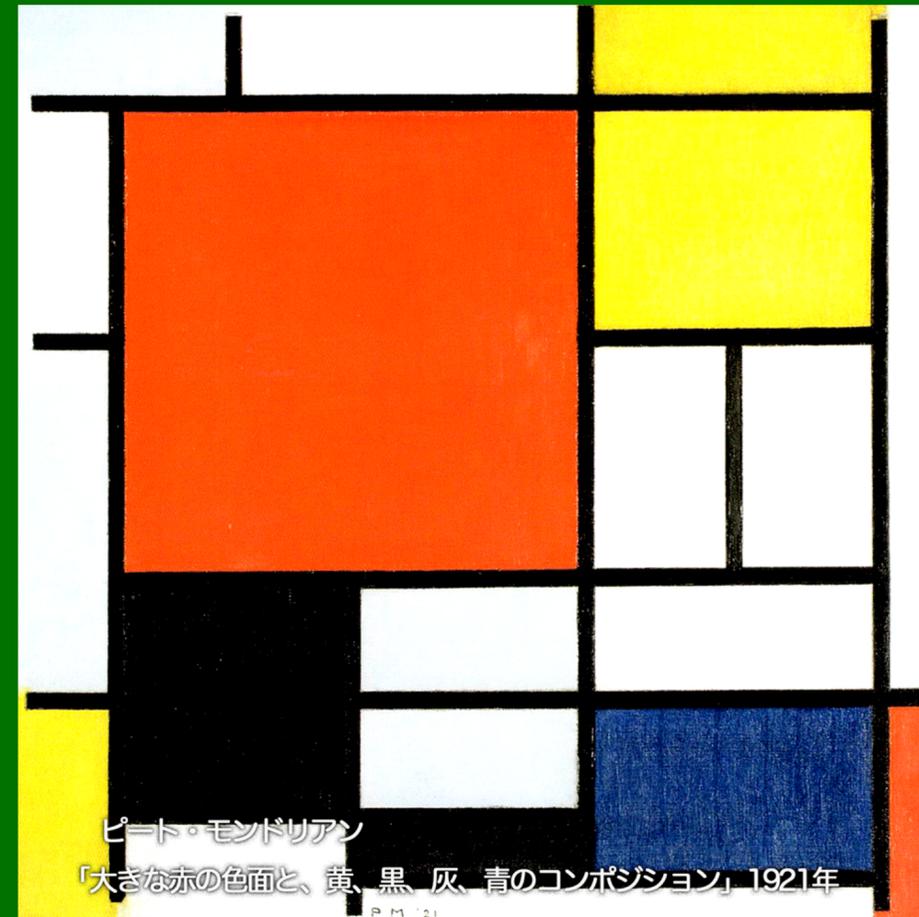
○ オランダ「新造形主義」の誕生 オランダではキュビズムの余波は「デ・ステイル」のグループと、その中核メンバーであるピート・モンドリアンが提唱した「新造形主義」の誕生に結び付いた。「デ・ステイル」とはオランダ語で「様式」を意味する語である。彼らは同名の雑誌を1917～28年まで刊行し、その理論の普及に努めた。



ピート・モンドリアン

「色面のある楕円形のコンポジション2」1914年

○ モンドリアン〈色面のある楕円形のコンポジション2〉1914年・・・モンドリアンがキュビズムから逸脱する傾向を示した初期の作品である。楕円形の枠組みには、ピカソやブラックの作品からの影響が認められるが、そこに描かれた作品には特定の主題はなく、完全な抽象絵画となっている。画面にちりばめられたグリッドの中は桃色や黄土色、灰色、水色で塗られ、独特のリズムを生み出している。

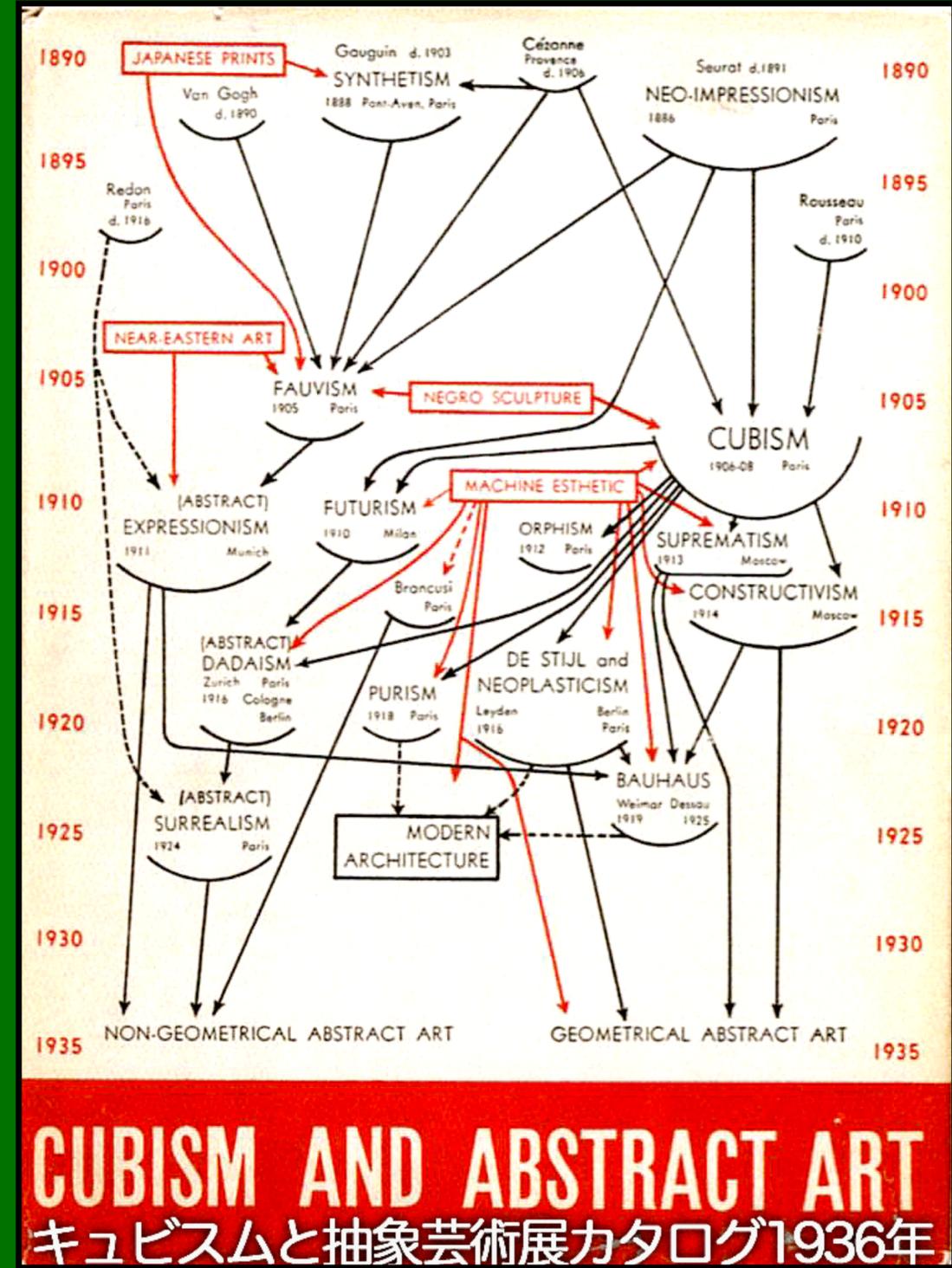
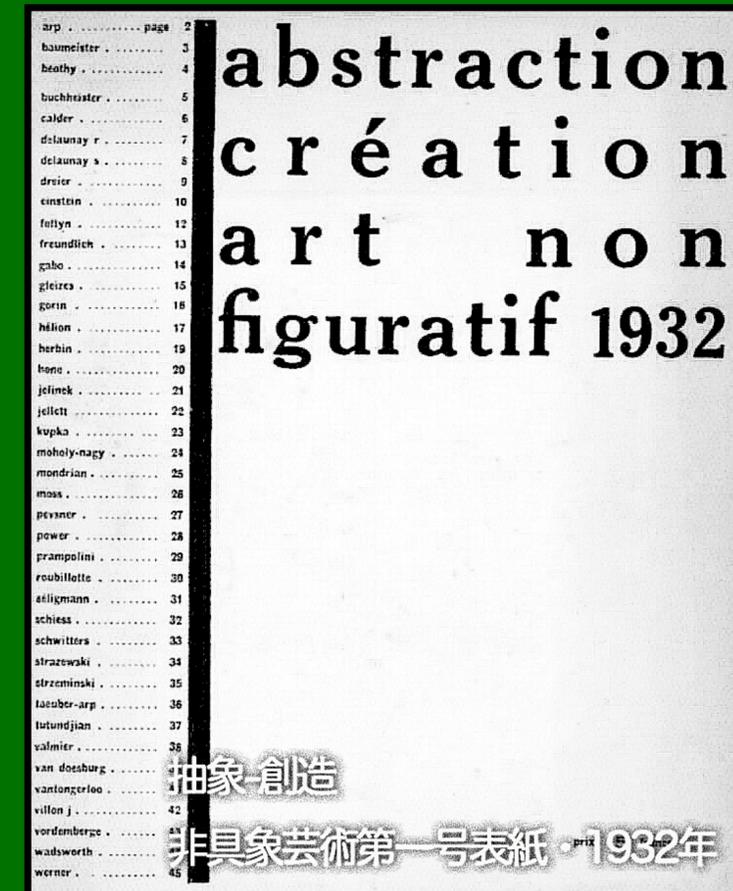


ピート・モンドリアン
「大きな赤の色面と、黄、黒、灰、青のコンポジション」1921年

○ ピート・モンドリアン
《大きな赤の色面と、黄、黒、灰、青のコンポジション》1921年・・・モンドリアンは色彩や線の様々な造形的実験を試みた末に、1920年頃から限定的な色彩で、単純な構図のグリッドの内部を彩るようになる。造形的な要素を極限まで単純なものに還元するこうした美学を、モンドリアンは「新造形主義」と名付けた。

第3章

キュビズムと抽象芸術



○ 1936年にニューヨーク近代美術館で開催された「キュビズムと抽象芸術」展では、このような抽象芸術の誕生と展開においてキュビズムがいかに重要な役割を果たしたのかが示された。カタログの表紙にはそのことを明示するようなダイアグラムが掲載された。

○ 国際的な運動「抽象・創造 (アブストラクシオン・クレアシオン)」は、ドゥースブルフがグループ設立の準備段階で没してしまったため、代わりにデ・ステイルの彫刻家ジョルジュ・ファントンヘルローが中心的な役割を担うことになった。最初は40名ほどだったメンバーも、最終的には100人ほどのグループへと拡大することになる。そこに属していたメンバーも、「セルクル・エ・カレ」の画家たち以外に、クプカやアルベール・グレーズ、ドロネー夫妻、ジョゼフ [ヨゼフ] ・アルバース、モホイ=ナジ・ラースロー、岡本太郎など、多様な国籍の芸術家たちが参加した。

CUBISM AND ABSTRACT ART
キュビズムと抽象芸術展カタログ1936年

第3章

1925年の博覧会とアールデコ様式

○ 絵画や彫刻を超えて・・・キュビズムにその源流の一つを持つ複数の抽象芸術運動の展開において顕著なのは、多くの場合、それが絵画や彫刻だけでなく、家具デザインや建築の分野をも包括するような動きとなっていったことだ。**1925年にパリで開催された「現代装飾美術・産業美術国際博覧会」、通称「アール・デコ博」**は、当時の人々にとって、現代芸術と装飾芸術の展開の結実を目の当たりにする場となった。とりわけル・コルビュジェとオザンファンが指揮をとった**「新精神館」**では、ル・コルビュジェがデザインした建築空間に、彼のデザインした家具と、キュビズムの芸術家たちによる作品が置かれ、**近代デザインとキュビズムとの親和性を強調する場**となった。

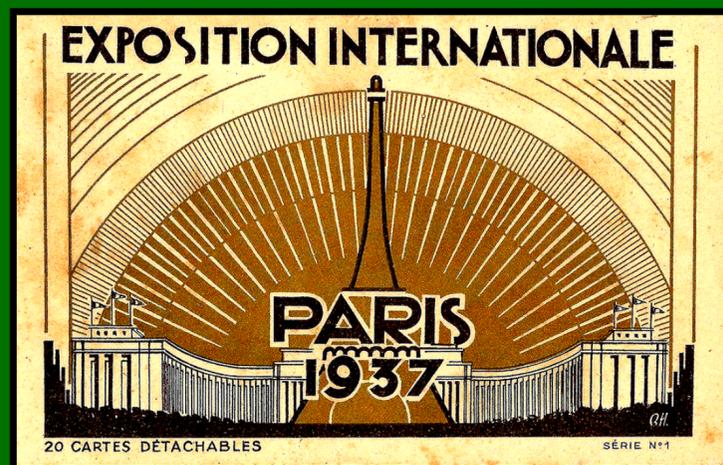


エスプリ・ヌーボー館「新精神館」1925年



第3章

1937年の博覧会とキュビズムの壁画



○ フェルナン・レジェ (諸力の輸送) 1937

年・・・レジェが発明館のために描いた本作においては、工事現場や機械の内部を想起させるような幾何学的なデザインに、山や虹、湖といった自然が溶け合うかのような光景が描かれている。灰色の不定形の浮遊物は、工場の煙なのか雲なのか判別がつかない。機械の力強い動きと雄大な自然との対話から、科学の進歩が生まれる様が描かれている。

フェルナン・レジェ「諸力の輸送」1930年

第3章

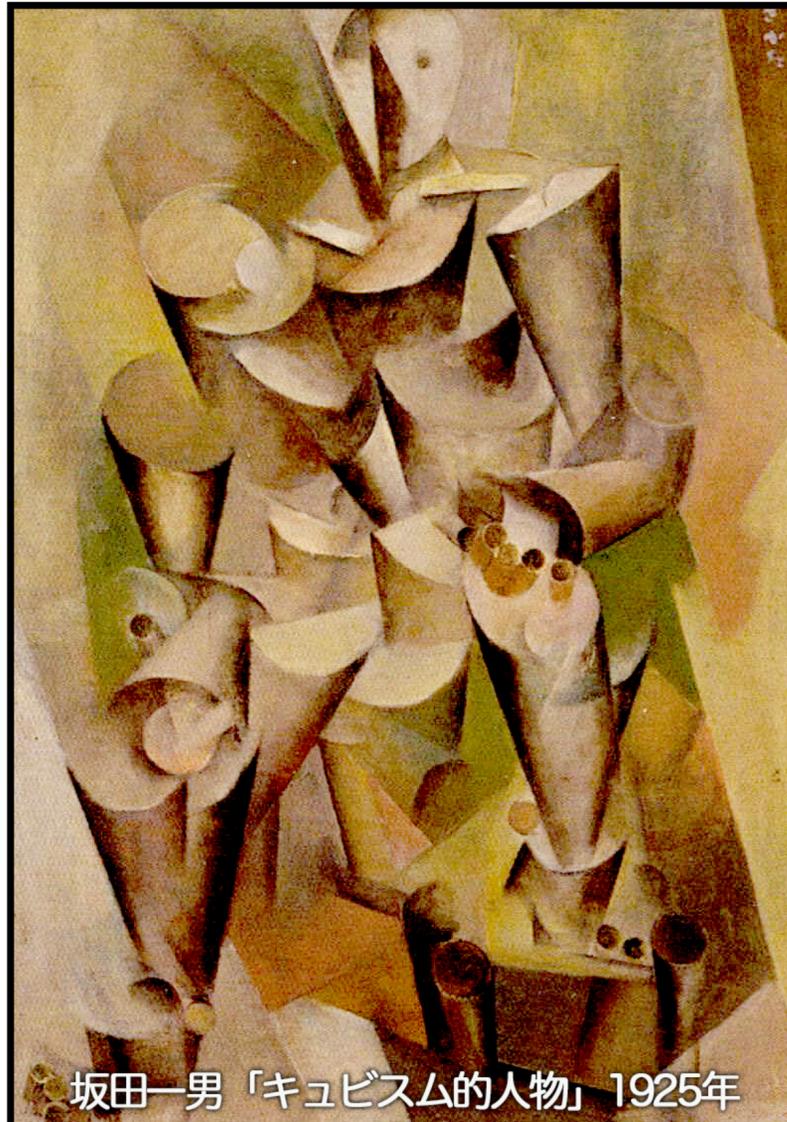
キュビズムと日本

○ 第一次世界大戦後には、パリで画塾を開いていたロートやレジェなどのキュビズムの画家に直接師事し、キュビズム風を描くようになった黒田重太郎や坂田一男などの画家も登場した。ロートの美学を日本に紹介する役割を果たしつつも、一時期のみしかキュビズム絵画を描かなかった黒田に対し、坂田はレジェから学んだキュビズム的精神と、当時レジェが関わっていたオザンファンらの純粹主義的な美学とを受け継ぎ、生涯にわたってキュビズム絵画を描き続けることになった。

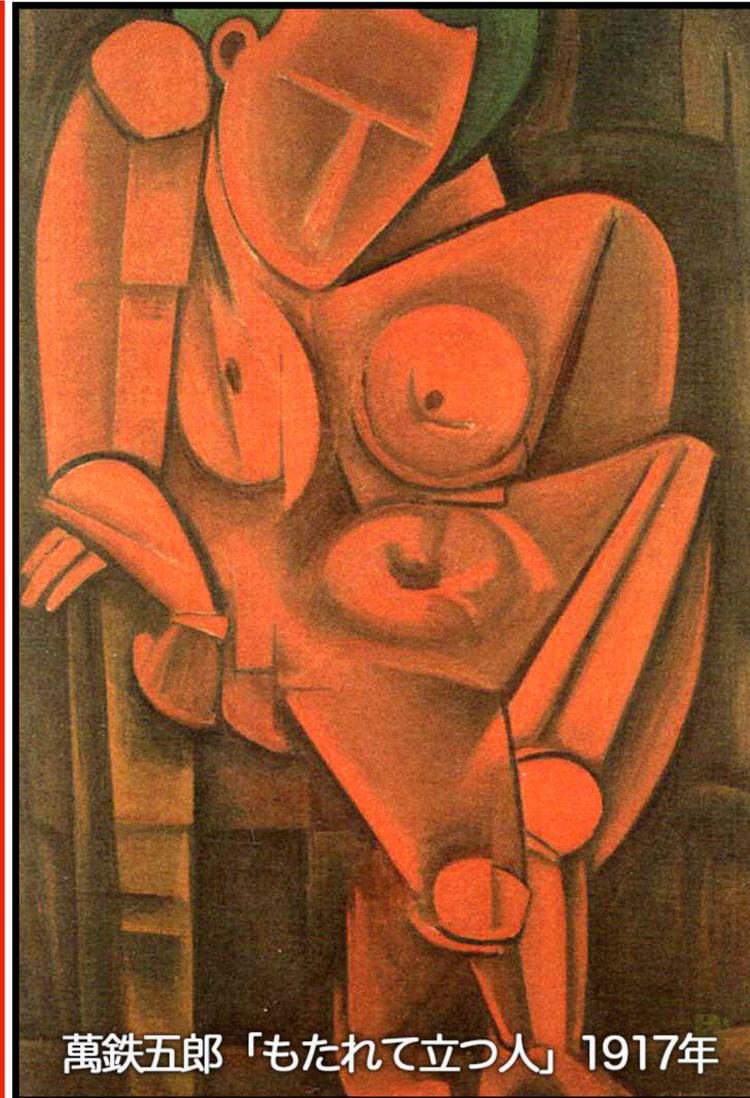
日本における
キュビズム
—ピカソ・インパクト
CUBISM in JAPAN
Picasso's Impact

2016年11月23日(水)祝
2017年1月29日(日)

○ 坂田一男 (キュビズム的人物) 1925年・・・人体を円錐や円柱に還元し、金属のような銀色の輝きを与える本作は、レジェのキュビズム絵画のなかでも、第一次世界大戦従軍直後の作品からの影響を強く感じさせる作品である。とはいえ坂田の作品における光の照り返しの表現はレジェの作品ほど劇的なものではなく、桃色や緑、黄土色の色づかいも極めて優しく互いに調和している。



坂田一男「キュビズム的人物」1925年



萬鉄五郎「もたれて立つ人」1917年

○ 萬鉄五郎 (もたれて立つ人) 1917年・・・身体の形状はキュビズム風に歪曲され、緑の髪を結い上げた頭部の表現もまた仮面のように様式化されている。空間構成が曖昧な背景表現も、キュビズム絵画の典型的特徴である。しかし肘をついて片足を上げる姿勢がはらむ緊張感や、そうした姿勢のせいで柔らかくたわんだ片方の乳棒と腹の形の表現などには、不思議と現実感が宿っている。

日本における
キュビズム
—ピカソ・インパクト

CUBISM in JAPAN
Picasso's Impact

2016年11月23日(水・祝)
～2017年1月29日(日)

わかりすぎる 抽象絵画研究/全31回
 美術講義 キュビズム? 2+2
 研究開発

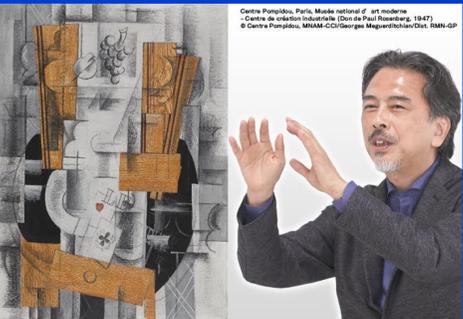


YOUTUBE

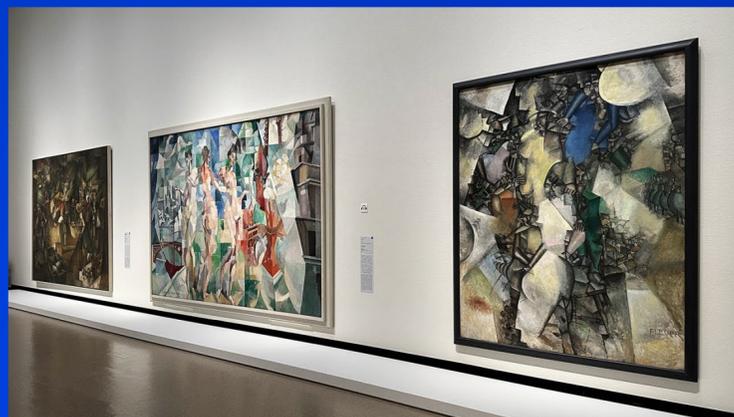
日本における
 キュビズム
 —ピカソ・インパクト
 CUBISM in JAPAN
 Picasso's Impact

2016年11月23日(水)祝
 ~2017年1月29日(日)

アート講座



順を追って理解できる!
 キュビズム入門 必見動画



WHAT IS...
 CUBISM

ファン・グリス
 命の後悔? キュビストの中核
 同胞ピカソと? ?



キュビズム創始者の一人
 ジョルジュ・ブラック
 のあまり知られていない10の事実



CUBISM

○ 今日のテーマ

「キュビズムは、いったいなぜ誕生したのかに迫る」

○ いかがでしたか。感想をお願いします

○ 次回のテーマのご要望を承りますので、忌憚なくお話しください。